

TSアルビノ少女は逆行
する。

和海狐

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自殺した青年が少女となり、様々な障害を抱えながらも理想を目指して逆行した世界で努力し続ける話。

処女作です。誤字やおかしな点多々あるかと思われませんが、その際は教えてくださいと幸いです。

目次

P r o l o g u e	1
少女の目覚め	9
少女の名前	20
少女の準備	35
少女のお出掛け	66
少女の父親	89
少女の呪い	111
少女の幼馴染	131
キャラ紹介＋裏設定	152
美空と1ヶ月とやらかし	160

Prologue

—— どうしてこうなってしまったのだろう。

草木も眠る丑三つ時、切り立った崖の上で青年は一人考える。
眼下に映る大海は青年の心を表すかのように真つ黒であった。

—— 本当につまらない人生だった……

ただひたすらに時間を、金を浪費し、そんな自分に嫌悪する。

「今度こそは自分を変えよう。」何度そう考え、実行しただろうか。

だが結局は自分自身の愚かさを再確認するだけで全て終わってしまった。

1人では何もできないと考え、誰かに手を借りようとしたことがあった。

しかし手を借りようとした途端に自身のくだらない自尊心プライドが人の手を借りることを

拒絶した。

そうして人生を消費していくうちに青年は全てを諦め、挑戦することさえやめてし

まった。

夢から、自由から、努力から、現実から、あらゆるものから逃げ続けた果てに青年はここにいます。

——ごめんなさい。許してください……

口から零れ落ちる言葉は今まで育ててくれた母親に対しての謝罪。

青年の両親は離婚してしまい、父親とはもはや滅多に顔を合わせることはなかった。

感謝することも謝罪しなければならぬこともある。返せていない恩もまだまだある。

けれど……

——もう、疲れてしまったんです……

これ以上、自身を嫌悪することにはもう耐えられない。これから先、自分の人生が良くなるとは思えない。

故にこれ以上、恥を重ねることがないように。これ以上絶望することがないように。

——俺はここで死のう。

遺書はない。遺すものも何も無い。当たり前前の話だ。青年は何も遺す気がないのだから。

周囲にひたすら迷惑をかけてきた自分が、せめて死ぬ時くらいは誰にも迷惑をかけないように、こんな深夜に誰もいないであろう場所にやってきたのだから。

飛び降りも、電車も、練炭も、首吊りも、どれも誰かに対して迷惑をかけてしまう。自分という身体したいを遺してしまう。

誰にも知られず、自分がここに来たという痕跡さえ遺さずに自殺を成功させる。

それが青年にとつてのせめてもの配慮であると同時に、自身の情しけない姿たいを見られたくないという最後の抵抗ブライドであつた。

その為に青年は何かを遺す訳にはいかなかった。

周囲を確認し、誰もいないことを確認してから万が一死にきれなかったことを考えて、水中から浮上することがないように重しを装着する。

そして青年は眼下の大海へと一歩ずつ歩みを進めていった。

——もしも…もしも次があるのなら…

進んでいく中でそんな考えが頭の中をよぎった。そしてそんなことを考えてしまった自身をまた嫌悪する。

次なんてない。次なんてあるはずがない。ましてや何か大きなことをなした偉人ならともかく、自分のような人間に次の生なんてものがあるわけがない。

そうして自身の甘い考えを消し去ろうとする。しかしそんな甘い考えは自身の中でくすぶり燻り続ける。

次なんてない。次なんてあるはずがない。だが、もしも…もしも次があるのなら…

——強くなりたい

夢を見よう。自由を手に入れよう。努力しよう。思い描く理想を手に入れて見せよう。

彼女を作り、友人を作り、誰からも尊敬されるような男になってやろう。

理想を思い描いているうちに青年はふとかすかに笑みを浮かべていることに気づい

た。

——考えるだけで何もかもが上手くいくのなら、理想になることができるのなら、ただそれだけ楽な人生だろう。もしもそうなら自分はここに立っていないというのに……

先ほどまでの自身を嘲笑し、立ち止まる。終点だ。これ以上先に進めば忽ちたちまち自分は大海へと落ちていくだろう。

これ以降はもう引き返すことはできない。最後の決断を前にして深呼吸しリラック
スする。

そして躊躇ためらううことなく前へと大きく1歩を踏み出した。

落ちる。落ちる。落ちる。落ちる。死へのカウントダウンが順調に進んでいく中、頭
を走馬灯が過っていく。

内容は、友達と遊んだことや親と外に出かけたことなど取るに足らない日常ばかり。
だが

——そんな日常が何よりも楽しかったな…:

死を前にしてようやく気付く。今更引き返すことはできないし、引き返そうとも思わない。未練はある。後悔も小さなことも含めれば数えきれないほどある。

それでも悲しいことばかりではなかったことに最後に気づくことができたのが何よりも嬉しかった。

海面に叩きつけられる。身体に大きな衝撃が走る。しかし即死することは叶わなかったらしい。

元々それほど期待はしていなかったが、即死していた方が楽だったのと思う。

息ができない。意思に反して身体は海面^{うへ}へ上がろうと藻掻き、それを重りが阻止する。

辛い。苦しい。冷たい。痛い。考えていた以上の苦痛に襲われる。

これが自分の犯した罪の罰だ。それだけのことをしたのだと自分を納得させる。

どれだけの時間が流れただろうか。5分？30分？それとも1時間かそれ以上？もしかするとまだ1分も経っていないのかもしれない。

ああ……まだ死ぬことはできないのか……あとどれだけの間苦しめばこの苦しみから解放されるのだろうか

もはや逃れることのできない死を前にして湧き上がるものは生への渴望と後悔であつた。

なんて自分勝手なことだろうか。散々好意を無視して死のうとしておきながら、いざ死を前にすると生きたいなどと思うなんて。

しかし最早助かる方法はなく、段々と体の末端から感覚がなくなっていく。

——ああ……よかった……

最後にそんな風に考えて青年の意識は暗闇の中に消え去った。

少女の目覚め

もう2度と目覚めることはないと考えていた意識が浮上し困惑する。ベッドからゆっくりと身体を起こし、そのままの体勢で思考する。

——— 確実に死んだと思っただのになぜ自分は生きているのだろうか？

自殺することに失敗したのだろうか？自分の考えた方法には何か漏れがあったのか
もしれない。

もしくは自殺するところを誰かに見られてしまったのだろうか？

周囲には誰もいないことを確認し、見つからないように気を付けていたつもりだった
のだが遠目から誰かが自分のことを見ていたのかもしれない。

そこまで考えたところでその可能性は低いということに気付く。

——— 明らかにここは病院じゃない。

もしもあの自殺が失敗していたのなら、もしも誰かに見られていたのなら、目覚める場所は病院のはずだ。

しかしここはどう見ても病院の一室だとは思えない。ならば失敗した可能性は低いのではないだろうか？

だが失敗したのではないとするのなら、なぜ自分はここで今もこうして生きているのだろうか。

——全部、全部夢だったのか？

これが一番現実的だろう。だが一番正解であつてほしくない可能性だ。

一体どこからだ。どこからどこまでが夢だったのだろうか？

あの辛さも苦しさも冷たさも痛みも全て本当に感じたもののはずだ。震える足を無理やり動かし、死への恐怖をねじ伏せて進んだことは現実だったはずなのに：・

もしもあの記憶のすべてが夢だったのなら自分はもう2度と立ち直ることはできないだろう。2度と同じことを実行することはできずただ生きるだけの屍となってしまう。

あの出来事が夢だということは自分にとってはそれだけ恐ろしいことだった。

考えれば考えるほど思考は下へ下へと悪化していき、自然と呼吸が荒くなっていく。

——取り敢えず今わかることだけでも確認するのが先だ

このまま思考を続けても碌なことにはならない。そう考え最悪の可能性から目を背ける。

もう一つ可能性が頭に浮かんだがそちらは考える前から切り捨てた。あまりにも非現実的すぎる。

いったい今は何時なのだろうか。大学はすでに春休みへと入り、今は長期休暇のため時間にはそれほど気を付ける必要はなかったが今の時刻を確認しようと無意識のうちにいつも近くに置いてあるスマホへと手を伸ばす。しかし……

伸ばした手は空を切ってしまい何もつかむことはなかった。慌てて視線を向けるもどこにもスマホの姿はない。

ベッドから落ちてしまったのだろうかと考えて周囲を見渡したところである違和感に気づく。

—— おかしい。もし自分の部屋だしたら明らかにおかしい部分がある。

ベッドの位置や部屋の構造は自分の記憶とは変わりない。

だがベッドの隣にあったはずの勉強机や本棚、パソコンといったものは一切なく、代わりに自身のベッドの隣には同じくらいの大サイズのベッドが存在していた。

このベッドは誰のベッドだ？そもそも此処は本当に自分の住む家なのだろうか？もし違うのだとしたら今いる此処は一体何処だ？

理解すればするほど新たに疑問が浮上し、一向に解決の糸口が見えない現状に思わずため息が出る。

—— 部屋の外へ出よう…

これ以上部屋にいても分かることはないだろうと半ば諦めにも似た感情を覚えながら先ほどから見えていた扉へと視線を向ける。

そしていざ扉へ向かおうと立ち上がろうとした時…

〈扉の外から誰かが階段を上ってくる音が聞こえ思わず動きを止める。〉

突然のことに驚くも、自身の現状を理解することができるとは思えない事態に大きな期待と不安を抱える。

どうすればいいのかと多少パニックになりながらもこの事態の原因を待つことに決めた。誰が相手でも対応ができるように深呼吸をすることで気持ちを落ち着けることにした。

段々と音が近づいてくることに再び大きくなっていく感情を必死に抑えながら視線は扉から決して離そうとはしない。

この足音の主は一体誰なのだろうか？早く扉を開けてその正体を現してくれないものかともどかしく思いながらも只々その瞬間を待ち続ける。

そして自分にとっては数分にも感じた時を経てついにその瞬間が訪れ身構える。

扉を開けて現れたのは…

「ああおはよう。もう起きてたの？」

自分にとってはもう2度と会うことはないだろうと考えていたお母さんの姿だった。

——ああ…よかった…

思わずそんな言葉が口から零れ落ちそうになる。

足音の主が自分のよく知る人物であったことは拍子抜けではあるがそれ以上に自分の知らない人物ではなかったという安心の方が何倍も大きかったのだ。

次にお母さんの姿を目にして浮かんだ感情は『喜び』と『後悔』だった。

迷惑ばかりかけ続けてしまったお母さんと再会することができたことに対しての『喜び』、そしてまた迷惑をかけてしまったことに対する『後悔』が同時に浮かび上がり争いあう。

そしてその後には浮かび上がった感情はやはり大きな『自己嫌悪』であった。

散々死のうとしておきながら再会を喜ぼうとする自分と、迷惑をかけると分かっているながら実行してしまった自分に向けての嫌悪感。

そしてそんな嫌悪感に共鳴するかのようにはかにも様々な悪感情が浮かんでは消えていく…

それらが段々と自分の心を黒く侵食していく様子が感じ取れた。

クローゼットから物を取り出すお母さんを視界に入れながら必死になって自分の中の黒い感情を抑えようとするも、自分の中の黒い感情は大きくなるばかりで全く収まる

うとはしない。

苦しい。気持ち悪い。震えが止まらない。呼吸が先ほど以上に荒くなつていき次第に目の前が真つ暗になつていく。

——誰か助けて。

そして感情を最早抑えることができなくなり意識を手放しそうになつた時…

「どうしたの!?!大丈夫!?!」

慌てて駆け寄つてきたお母さんの必死な声でピタリと感情は収まり元に戻つた。ふらつく身体を手で支え、荒くなつた呼吸を深呼吸で整える。

そして心配げな様子のお母さんに対して「大丈夫」だと声を出そうとすると…

「うん。大丈夫！」

口から出たのは自分のものとは思えない程の可愛らしい声だった。

いきなりの出来事に思わず思考が停止する…

———今の可愛らしい声は何だ？本当に自分の声なのか？

「大丈夫ならいいんだけど…」

聞こえてきた声に反応してお母さんの顔を見てみるが自分の声に対して疑問を持っている様子はなさそうであった。

そんなお母さんの様子に対してこちら側が疑問を抱きつつも、思考を続けていると続けざまにある違和感に気づいてしまう。

—— 上体を起こしているだけだからとはいえ自分の目線はこんなにも低かっただろうか？

目線が低くなるなど普通ではありえないことのためそんなことはないといつもなら切り捨てているのだが先ほどの声の件もあつてかどうしても気になってしまった。

そして被っていた布団を捲り自分の身体を確認してみるとそこにあつたのは…

まるで子供のような小さな手足と他人ひとよりも明らかに白い肌であつた。

自分の身体だと思うことのできないその姿に小さく悲鳴が漏れる。

—— これじゃあ… これじゃあまるで…

頭をよぎるその考えに思わず有り得ないと叫びそうになるがどう考えてもそれ以外は考えられない。

もしもそうなのだとしたら確かめる方法は…

「お、お母さん！」

「どうしたの？」

「鏡って持ってない!？」

「ええと・・ 持ってるけど」

「お願い貸して!!」

もはや自分の声に対して全く関心を持たずにお母さんに対して鏡を貸してもらえよう。よう。お願いする。

「は、はい鏡。」

「ありがとう！」

お母さんから渡された手鏡を持ち躊躇うことなく自身の顔を確認する。
そこに写っていたのは……

何とも綺麗な白髪に美しい空色の眼を持った可愛らしい少女の姿があった。

少女の名前

突如として現れた到底理解できない現実を前にただ茫然と鏡に写る少女を見続ける。

——俺は夢でも見ているのか……？

自分は夢を見ているのではないか？そんな風に考えてみる。

目の前に見えるこの光景は偽りであり、本当の自分は病院で昏睡状態にある。

これが最も納得できる考えだろう。

しかし試しに頬をつねってみても痛みが走るだけで目が覚めることはない。

そして鏡に写る少女が自身の頬をつねっていることに気づいた。

驚いて手を放せば少女もまたその手を放す。

——本当に……本当にこの鏡に写る少女は自分なのか……？

少しでも情報を得ることはできないかと鏡に写る少女を改めて観察する。

肩まで伸びた白い髪、日本人のものとは思えない空色の瞳、薄いオレンジよりもむしろ白に近い色をした肌その全てが19年間付き合ってきた自身の容姿とは似ても似つかない。

——分らない。何もかも分らない。

自分が何故生きているのか。何故此処にいるのか。何故少女の姿になっているのか。ヒントはなく、答えらしきものも見つからない手詰まりな状況に全てを投げ出してしまいたい。

「どうしたの？本当に大丈夫？」

お母さんの声が聞こえ、顔を向けてみれば困惑した表情でこちらを見つめるお母さんの姿があつた。

当然のことだ。お母さんからしてみれば先ほどまでの自分はさぞかしおかしく見えたことだろう。

「うん。大丈夫。ちよつと気になったことがあつただけ。」

嘘だ。大丈夫なわけがない。

しかし、だからといって今の自分の状況を馬鹿正直に話すわけにもいかなかった。そんなことをしてしまえば自分はお母さんから狂人だと思われてしまいかねない。そして何よりもお母さんに対してこれ以上迷惑になることをしたくはなかった。

「そつか……大丈夫ならいいわ。そういえばもう起きるの?」

「今何時?」

「今は8時を少し過ぎたくらいね」

「8時かー。じゃあもう起きる。」

お母さんとごく普通の会話をしているとふとある疑問が頭に浮かんだ。

——もしこれが現実なのだとしたら俺の名前はどくなっているのだろうか?

男の時の自分は『しろかわあつや白河裕也』という名前だった。

だが少女となっている今は苗字は同じだとしても名前はきつと違うだろう。なら今の自分の名前は一体何なのか。それがとても気になる。

——自分の名前は何かなにか？なんてストレートに聞くわけにもいかない。それとなく聞く方法はないものか…

「わかったわ。今日は大丈夫そう？1人で階段下りられる？」

——うん？別に階段くらい1人で下りられるが…？

「え？うん。1人で下りられるよ。」

「そう。なら先に下りて朝ご飯の準備をしておくわね。」
「わかった。」

そう言ってお母さんは部屋を出ていった。

——さっきの言葉が少し気になるがこれ以上この部屋で考え続けるわけにも

いかない。

そう考えベッドから降り立ち扉に向かって1歩ずつ進んでいく。

途中、この体に慣れていないせいかな何度も足がふらつき転びそうになるがどうにか扉の前に辿り着く。

——ドアノブの位置が思ったより高い…

遠目からでは気付かなかったが腕を上にあげないとドアノブが握れないことに気付く。

今の自分は男の時よりかなり身長が縮んでいるようだ。

ちようど頭がドアノブの位置までしかないことから考えるに今の自分は1m程らしい。

どうにか腕を上げることのでアノブを握りこの部屋から出た後のことについて少し考える。

——今の自分が少女の姿である以上女の子らしい口調にするべきか…

郷に入れば郷に従えとは少し違うかもしれないが、いつ元の身体に戻れるかわからない以上は今後のためにも家族や知人に不信感を与えるのは得策ではないだろう。

その為にも誰かと一緒にいる際は女の子らしい口調と振る舞いをし、ぼろが出ないよう気を付けなければならない。しかし……

——女の子らしいかあ……

当たり前だが女の子らしい振る舞いなんて一度もしたことがない。生まれてからずっと男として生きてきた、男としての生き方がこの身に染みついていくことは間違いない。女の子らしくするということは自分のこれまでをすべて否定することに他ならなかった。その上一人である時ならばまだしも、誰かという時はずっとその演技を続けなければならないのだ。

この身体でいる間は何時までも…… 何時までも……

——自分にできるのだろうか？

夢から、自由から、努力から、現実から、あらゆるものから逃げてしまった自分がこんな無理難題を成し遂げられるのだろうか？

—— いや。違うな。やらなければいけない。

できるできないなど問題ではない。やらなければならぬのだ。
今までの自分を否定することの何が恐ろしい？

男としての自分はあの場所で死んでしまったというのに。
今更男として生きようと足掻く方が見当違いというものだ。

—— これから先、自分は女として生きて見せよう。

一体いつまで続くのかはわからない。もしかしたら死ぬまで続けなければならないかもしれない。途中で何度もやめてしまいたくなることだってあるだろう。だが何があっても成し遂げて見せよう。そう覚悟して部屋の扉を開けた。

部屋を出て、階段へ向かって歩いていく。

数歩歩くだけである。一点を除けば記憶と何も変わらない階段を見つけることができた。

——手すりがある……

家の階段には手すりはないはずなのに、なぜか存在している手すりを見て疑問に思う。

少女となつた弊害か、思うように動けない今の自分にとつてはこの上なくありがたいものではあるが、本来存在しないはずのものがあるとやはり気になるものだ。

自身が男から女になつたことによる影響か。それとも設置しなければならなかつた理由でもあるのか。どちらにせよ今の自分にわかることではないだろう。

あつて困るものでもないのだから有効に活用しようと思ひ手すりを持ちゆつくりと階段を下りて行つた。

何か問題が起こることもなく、無事に2階のリビングへと辿り着くことができた。

部屋を見渡しお母さん以外の家族の姿がないか探してみるが見つからない。自分とお母さん以外に起きている家族はいないようだ。

先にリビングへ下りて行ったお母さんは今何をしているのか気になり、キッチンを覗いてみると朝食の用意をしている姿が見えた。

どうやら朝食にはもう少し時間がかかりそうだ。リビングの本格的な探索は朝食の後にもずるとして、今はテレビでも見ながら寛ぐことにしよう。

緊急事態だ。

何が起きたのかを簡単に言うとするならば、トイレに行きたくなってしまうた。リビングから1階のトイレには何の問題もなく行くことができた。

寝間着のズボンと見慣れない子供用の下着を下ろし、便座に座ったところである問題が発生したのだ。

———なんだかもの凄く恥ずかしい：：

何かいけない事をしているような気分になり、顔がどんどん熱くなっていく。

一縷の望みにかけて視線を下に向けて確認してみたが、そこに自分の望んだモノはな
くただ小さな割れ目があるだけだった。

望みが絶たれたことに大きな落胆と少しの安堵を覚える。

———ああ本当に女になってしまったんだな：：

自分を襲った現象を改めて理解し、女となったことを自覚する。

すぐさま視線を上へと向けて見えてしまったものを記憶の外へと追いやろうするが、

意識すればするほど余計に思い出してしまいさらに顔が熱くなるのを感じた。

何時かは恥ずかしがらなくなるのかもしれないが、今はどんな些細なことでも恥ずかしく感じてしまう。

そうこうしている内に限界を迎えてしまい、行為が始まる。思わず自分の耳を塞いでしまった。

耳を塞いでもかすかに聞こえる音を指を使って無理やり遮断し、後は一刻も早く行為が終わってくれるようただ願う。

なんとか十秒程の恥辱を耐えることはできたが行為が終わった後も羞恥心でしばらくは動くことができず、ぼんやりした思考で座り続けていた。

「ミソラー。ご飯できたよー。」

どれほどの時間そうしていただろうか？上の階からそんなお母さんの声が聞こえてきた。

——ミソラー……？そうか自分はミソラーという名前なのか。

知りたいたと思っていた自分の名前を知ることができたのは良いことではあったが、今の自分にはどうでもよく思えてしまう。

しかし、いつまでも便座に座り続けるわけにもいかずトイレトペーパーの方へとゆつくりと手を伸ばした。

必要な量より少し多めの量を千切り、視線を上固定したままさつと拭いていく。

未知の感覚に声が漏れそうになったが拭いた後はすぐに水を流し、脱いでいたものを着てさつさとトイレから退出した。

「ああミソラ朝ご飯の用意できた……って少し顔が赤いけど何かあったの?」

「え? あ。いや……な、なんでもないよ?」

「ふーん。ならいいんだけど。」

「そ、それより朝ごはんは何?」

「食パンよ。飲み物は牛乳でよかったわよね?」

「うん。大丈夫だよ。」

「マーガリンとジャムはそこに置いてあるから塗りたかったら塗ってね。」

「わかった。ありがとうお母さん。」

トイレから出た後は用意の終わった朝食を食べようとリビングへと戻ってきた。

正直に言うとも今も先ほどのことが思い出されてな叫び出しそうではあったがお母さんの前でそんな奇行をする訳にもいかず、なんとか自分を制御していた。

「いただきます。」

これからあの行為を何回もしなければならぬと考えると気が重い。だがやらないなんて選択はないのだから慣れていくしかないだろう。いつになれば慣れるのかは全くわからないけれど。

それにしてもまさか自分があそこまで耐性がないとは思わなかった。男の時は恋愛経験なんて一度もなかったけれど動画などで身体を見たことはあったのだ。

やはり理想がどうであろうと現実には思い通りにはいかないものである。

——— とういえばもう一つ確認したいことがあるんだった…

先ほどの出来事のあまりの衝撃や羞恥心で忘れてしまいそうだったが、もう一つとても重要なことがあった。

「ねえお母さん。」

「うん？ミソラどうしたの？」

『『ミソラ』って漢字でどう書くの？』

自分の名前の書き方だ。聞かなくても何時かは知ることになるだろうが早い内に知れるのならば知っておきたいのだ。

どういった経緯でつけられた名前なのか。その名前にどんな意味が含まれているのか。

名前を知るといふことはとても重要なことだ。

「あれ？言ったことなかったっけ？」

「あつたかもしれないけど忘れちゃった。」

「もう。しょうがないわね。ならもう一回教えてあげる。」

そう言ってお母さんは紙を取り出し文字を書くと私に見せてきた。

「美しい空と書いて美空それがあなたの名前よ。」

「美空……それが私の名前……」

「あなたの瞳の色から取った名前よ。大空の様に広々と自由に生きなさい。」

「うんわかった。私頑張る！」

「困ったことがあったらいつでも頼っていいからね。あなたは私の大事な娘なんだから。」

『白河美空』それがこれからの私の名前で大事な私の証だ。

少女の準備

「ごちそうさまでした。」

名前の件の後は特にこれといった会話もなく、食事を終えた。

食器を持ち台所へと持っていく。身長が低いせいで苦労したがなんとか落とすことなく食器を置くことができた。

——これから何をしようか。

これからの予定を考えるために時間を確認しようと時計を見ると8時36分を指していた。

——まだ起きてから1時間も経っていないのか!?

予想に反して進んでいない時間に驚く。時間の流れはこんなにも遅いものだった。

ろうか？

昔に年齢を重ねるにつれて時間の流れが速く感じるようになることがあったが、本当にその通りに思えてしまう。

今の自分と大学生の時の自分の体感時間を比較するとどれだけの違いがあるのだろうか。

思いもよらない出来事に思わず考えが脱線しそうになってしまうが、すぐさま思考を切り替えて本来の考えへと戻す。

これといった予定もなく、時間は有り余っている。一体何をしようか？

——まずは着替えからか。

自分がまだ寝間着姿であることに気付く。

特に外出する予定もないのだからわざわざ着替える必要はそこまでないのかもしれない。

ただ寝間着をずっと着続けているとどうしても少し気持ち悪く感じてしまうのだ。

それに自分が知らないだけで何か予定が入っている可能性だってあるのだから着替えておいた方が後々の為にも良いだろう。

「お母さん。着替えてどこにある？」

周囲には着替えらしきものは見当たらない。

ならば、まだ着替えが出ていないか、目に見えない場所に置いてあるのだろう。

「ちよつと待つてね。今出すわ。」

やはり出ていなかったようだ。

その場で少し待つていると着替えを手渡される。

渡された着替えは白色のTシャツの前にフアスナーのついた黒色の少しゆつたりとしたパーカー、動きやすい灰色のスウェットパンツとこれといって可愛らしさのない部屋着だった。

一体どんな服を渡されるのか内心戦々恐々だったが少し肩透かしを食らった気分だ。出来る限り自分の身体を見ないようにしながら手早く着替える。

パーカーのフアスナーは閉めると少し暑く感じてしまうので開けておくことにした。無事着替え終わり、自分の姿を近くにあった移動式の姿鏡で確認してみる。

——悪くない…

オシャレさといったものは感じないがなかなか良い。

自惚れなのかもしれないが、今の自分の容姿はかなり優れていると言っている。

男の時の自分と比べると天と地の差だろう。

そんな可愛らしい少女の部屋着姿というものはどことなく感じるものがある。

もちろん出てくる興味や感情は劣情とは全く違うものであるが。

もう少し自分の姿を見続けていたい気持ちもあるが、未だにわからないことだらけの現状を一刻も早く理解するためにも、後ろ髪を引かれる思いでその場から離れた。

——また状況が落ち着いて、1人になることができた時にでも色んな服装を試してみるのがよさそうだ。

そんなことを思いながら朝食の前に考えていたりビングの探索を始めることにした。

リビングの探索を初めて小1時間、色々と発見があった。

まず第1に『私』が生きている時間は、『俺』が死んだ時よりも過去であろうこと。

このことはリビングに置いてある家具や家具の配置から分かった。

中学2年の時から飼っていた犬がいらないことから少なくとも6年は昔じゃないだろうか。

もちろんこれまでの件のことを考えると、元々犬を飼っていない可能性もあるため、過去であると断言することはできない。

——過去… 逆行かあ…

はつきり言つて逆行なんてあまりにも非現実的だ。以前の自分であれば到底信じる
ことが出来ないだろう。

だが既に少女となつてしまった自分という異常事態の一例があるのだ。

信じるしかないのである。今の自分ならば魔法や異能力があるといわれても信じて

しまうのではないだろうか。

次に『白河裕也』という人物は存在していないということだ。

このことは断言しても良いだろう。小1時間もの間探し続けて、『俺』の痕跡を1つも見つけることが出来なかつたからだ。

お母さんに聞いたたり、写真を見ることが出来たのならすぐに分かることなのだろうが、今の自分は不信感を与えないためにも怪しい行動をする訳にはいかなかつた。

最後に自分は俗に言う『アルビノ』であることだ。

まあ初めて自分の姿を見たときからそんな気はしていたのだが……

アルビノの生物はほとんどの場合、視覚的障害があるはずだが今のところこれといった障害は感じない。

何にせよ、外出をする際は幾つか気を付けなければならないことがあるだろう。

他にも小さな違いや発見は多々あつたが、大きな発見はこの3つだけだつた。

リビングの一通りの探索を終え、大きく深呼吸をする。

そして今までわざと目を背けていたものを視界に収めた。

——カレンダー……

リビングの探索を始めた時からあることには気づいていた。
今が一体何時なのかはカレンダーを見ればすぐに分かったことなのだろう。
それでもわざと目を背けていた。それは何故か？

——怖い……

真実を知ることが怖かったのだ。真実を知るにはあまりにも心の準備ができていなかった。

なので先に部屋の探索をし、仮説を立てる中で何があってもいいよう心の準備をしていた。

遂に答え合わせの時間だ。

ゆっくりゆっくりと少し視線を下に向けながらカレンダーの方へと近づいていく。
数歩程の距離だが、30秒ほどの長い時間をかけてカレンダーのもとへと辿り着く。
そしてゆっくりと視線を前に向けた。そこに書いてあったのは……

——つ!? 20XX年4月4日!?

思わず驚いてしまう。20XX年それはつまり

——1……5年前……

自分が自殺した時から15年前である。

多少は昔であると考えていたが、予想以上の事実で頭が真っ白になる。

15年前ということは今の『私』の年齢は4歳ということになる。

通りで身長が小さい訳だ。4歳ならば身長が1m程しかなく、納得できるだろう。

しかし頭の納得とは裏腹に驚きのせいか足がふらつき倒れそうになる。そのまま重力に身を任せしばらく床に座り込んだ。

少し時間が経ち、気持ちが落ち着いてきた。

時刻は現在9時51分とまだ起きてから2時間弱しか経っていないが精神的疲労は既に一日の許容量を大きく超えている。

だが1日が終わるまでまだ半日近くあるというのだから本当に気が滅入ってしまい

そうだ。

——移動しよう。

このままずっと床に座り込んでいるわけにもいかない。座るのならばリビングのソファの方が断然いいだろう。

ふらふらと立ち上がりソファへと向かう。同じ部屋の為、数歩歩くだけで前まで来ることができた。

座ることなくそのまま前に進み、ソファに倒れこむ。

——疲れた……このまま昼寝でもしようか。

この先の予定は何もない。それに今はもう何もしたくない。

ならば目的もやる気もなく彷徨うよりも昼寝でもして少しでも疲れをとった方が有意義というものだ。

クッションを枕に仰向けの姿勢で寝転がり目を閉じる。

精神的疲労のせいかはたまた慣れない身体に予想以上に疲れていたのか、すぐに眠気

が訪れ意識が朦朧としてきた。

眠りに身を任せ意識を手放そうとする。

へどこかの部屋の扉が開く音がする。く

眠りを妨げられたことを不快に思いながら僅かに目を開ける。

耳を澄ませることで音の発生源を探ろうとする。場所はすぐに特定することが出来た。

——上の階か。

音は3階から聞こえてきた。音を出しているのは誰なのだろうか。

お母さんかと一瞬考えるが、お母さんは先ほど下の階に用事を済ませに行つてからまだ戻つてきていない。

ならば…

——お兄ちゃんか。

——それはそうか。

予想通り音の正体はお兄ちゃんだった。最後に見た記憶では歴とした大人だったが15年前なので少年の姿なのは当たり前だろう。自分とお兄ちゃんは2歳差であるため、今のお兄ちゃんは6歳だろうか。

「お母さんは？」

「今1階にいるはずだよ。」

「そっか。ありがとう。」

お母さんの居場所を聞かれたので素直に答える。お兄ちゃんはお母さんを探しに行くのか下の階へと降りて行った。

気になっていたことが解決し、また1人になったため仰向けの姿勢へと戻る。

これでもう眠りを妨げるものはないだろう。ふあーと大きなあくびを1つする。

目を閉じて少し過ぎるとまた心地よい眠気が襲ってきた。

意識が朦朧とする。今度は誰にも邪魔されることなく意識を手放した。

少年はそんな日常がいつまでも続くことを願っていました。



目が覚める。

随分と懐かしい夢を見たような気がする。

夢の内容は全く覚えていない。

だが呼吸は落ち着いていて、それ程汗をかいていない事から少なくとも悪夢ではなかったのだろう。

身体をゆつくりと起こしてから自分の身体に掛けられているそれに気付く。

——— 毛布……

お母さんが掛けてくれたのだろうか。

季節が春へと変わる4月とは言え、まだまだ肌寒く感じる日は多い。

その為こういう心遣いは素直に嬉しかった。

大きく伸びをしてからソファーから降りて立ち上がる。自分はどのくらい眠っていたのだろうか。

「おはよう。と言つてももう昼だけだね。」

食卓の方からお母さんの声が聞こえてくる。

声の方を向いてみるとそこには食事をしているお母さんとお兄ちゃんの姿があった。

時計を見てみれば針は12時21分を指している。どうやら自分は2時間以上眠ってしまったようだ。

「昼食できてるけどお腹は空いてる？もし空いてなかったら後で食べても良いのよ。」

「大丈夫。お腹空いてるから今食べるよ。」

朝食を食べてから半分以上の時間を眠っていたが、そもそも朝食に食べたのは食パンと牛乳だけだ。

既に昼食を食べられるぐらいにまでお腹は空いている。

「昼食何？」

「今日はうどんよ。」

「うどんかー。」

昼食の内容を聞きながら食卓の席に着く。

正面の席にお兄ちゃんが自分から見て右の席に母親が座っている。

席に着いてから少し経つとお母さんが井に入ったうどんを持ってきてくれた。

「いただきます。」

男の時よりも一回りほど小さな手で箸を持つとうとする。

——— 持ち難い…

物を持つ程度ならば何の問題もなかったが、箸を持つとなれば話は別のようだ。

ただでさえ慣れていない子供の身体に持ち難い箸が合わさればここまで難しいのか。何とか箸を持ち、手を震わせながらうどんを掴む。

そしてゆつくりとうどんを持ち上げ口元まで持つてくるとチュルチュルと啜り始める。

——おいしい。

うどんは手軽に作れて美味しいから好きだ。

持ち上げていた麺をすべて啜り終わるともう一度うどんを持ち上げ啜る。

同じ動作を繰り返していく内に次第にコツを掴んでいき、うどんを掴むことが容易になっていった。

「ねえ美空。」

「チュルツ… うん？」

会話もなく食事をすることに集中していると先に食べ終わったお母さんから話しかけられた。

噉っている最中のうどんを噛んで切り、口内のものを飲み込んでから返事をする。

「どうしたの?」

「もし美空が良かったらなんだけど、1時半くらいからお出かけしない?」

「お出かけ?」

「そうよ。もちろん美空ができる限り日の光に当たらないよう対策はするから。今日は調子も良さそうだしどうかしら?」

「それなら別に良いよ。」

「ありがとう。良かったわ。」

一体どんな用事かと思い、聞いてみればただの外出の誘いだった。

アルビノである自分が日中に外に出ることは良くないのかもしれない。

だが今の自分よりも美空のことを知っているお母さんが対策をすと言うのなら多少は大丈夫だろう。

何より、ある程度今の『私』について知ることができた自分は手持無沙汰により暇だった。

お母さんからの誘いは、どうやって暇を潰そうかと考えていた最中の自分にはとても

嬉しい誘いだ。行かないわけがないだろう。

「お兄ちゃんはどうするの？」

「祐樹？祐樹も一緒にお出かけする？」

「俺はいいかなー。2人で行ってきなよ。」

「そう。なら2人で行きましょうか。」

「うん。わかった。」

どうやらお兄ちゃんは行かないらしい。

因みに祐樹というのはお兄ちゃんのことだ。『しらかわゆうき白河祐樹』それがお兄ちゃんの名前だ。

ついでに言えばお母さんの名前は『しらかわゆきか白河雪花』と言う。

「いちそうさまでした。」

話をする傍ら、食事も続けていたが無事にうどんを完食することができた。

時計を見れば時刻は12時41分と1時半まではまだ時間があるようだ。

食後は正直あまり動きたくないので本を読んだり、TVを見ながら出発の時刻までの

んびりと過ごすごことにしよう。

——その前にトイレ行きたい……／＼／＼

少女としての2回目のトイレは、最初よりは多少はマシと言っても直ぐに慣れる訳もなく、恥ずかしさで狂いそうだった。

時刻は1時15分。

2回目の恥辱を無事に終え、そこからは予定通りTVを見ながらのんびりと過ごしていた。

「美空ー。」

「何？」

「はいこれ。」

「何これ？」

お母さんから話しかけられ返事をする、あるものを渡される。広げてみるとどうやら1つの服のようだ。

「… ワンピース？」

「そのままの格好で出かけるわけにもいかないでしょう？だからそれに着替えなさい。」
「まあ… 確かに。」

一理ある。今の自分の服装は完全に家にいる時用の服装だ。

このままの服装で買い物に出かけたら悪い意味で目立ってしまうだろう。

それに折角優れた容姿をしているのだから自分に似合う可愛い服装をしてみたい気持もある。

だがそれでも…

—— ワンピース… ワンピースなあ… 恥ずかしい。

精神が男である自分にとってはまだ避けていたいの1つだ。

自分の予定ではこの身体に慣れてから段々と女性の服装を慣らしていく予定だった。

しかしまさか初日にして着なくてはならない事態になるとは思わなかった。

心では着ようと思っけていても、身体が思い通りに動いてくれない。

もちろんお母さんに言えば着る服を変えてくれるかもしれないが…

——ああもう！覚悟を決めろ『俺』！（精神は）男だろうが！！

女性らしい服装が何だ。何が恥ずかしいだ。

部屋から出る前に少女らしくすると決めればかりじゃないか。男に二言はない。

どうせ夜にはお風呂に入って、嫌というほど自分の身体を見ないといけなくなるんだ。

今更自分の服装くらいで恥ずかしがっていたらずっと前に進めないだろう。

——ゴクリ…いくぞ…

1度大きくつばを飲み込み、着ているパーカーとTシャツを手早く脱いでいく。脱ぎ終わった後はすぐに渡された長袖の白いワンピースへと手を掛ける。

ワンピースを自分の前に持つていき1度大きく深呼吸をした。

そして服を脱いだ時とは反対にゆつくりとしたスピードでワンピースを着ていく。

じつくりと時間をかけてワンピースを着終えると最後に履いていたスウェットパン

ツを脱いでおしまいだ。

着替えが終わり立ち上がる。

———
め、滅茶苦茶スースーする…：／／／

女性の服装をしている恥ずかしさと下半身を襲う寒さに頭から湯気が出そうなほど顔が熱くなっていく。

覚悟はしていたとは言え、実際に着てみると予想以上に恥ずかしい。

何か別のことを考え続けていないと脳が茹で上がってしまいそうだ。

———
女性はいないなあ…

街中で見かけるワンピース姿の女性達は全員この感覚に耐えているのかと考える感心する。

自分には好き好んでこんな服を着ることは絶対できない。

「はい、これ。」

必死に未知の感覚に慣れようとしているとお母さんからまた別の何かを渡される。

少し短めの灰色のズボンのようだが、これは一体なんだろうか。

「…これは何？」

「レギンス。ワンピースの下に履くものよ。」

「あ。そうなんだ…。」

渡された灰色のレギンスをワンピースの下に履く。

下半身を襲っていた感覚が無くなったことで急速に頭が冷えていった。冷静に考えてみれば下に履くものが無い筈がない。

平常時であればすぐに気づくことができただろう。だがあの沸騰した頭ではそこま

お母さんが朝にも使った姿鏡を自分の前に持つてくる。
言われた通りに鏡を見てみれば、今の『私』の姿が写っていた。

——これが私か…

白。その一言に尽きるだろう。

頭から足先に至るまで全身の殆どが白に染まっている。

はつきりとした色を持っているのは空色の眼と薄い赤色をした唇、それと胸元に付いている青色のリボンの装飾くらいだ。

そして全身を覆う白がそんな数少ない色をより一層引き立てている。

ただでさえ際立っている容姿だったが、最早この世のものとは思えないような雰囲気を感じさせる。

しかし不思議と違和感を感じない。

呆けた表情で鏡を見つめる自分の姿を見て、表情を変えてみようと思いつつ。

どういう表情をしようか迷ったが、無難に鏡の自分に向かって微笑みかけてみることにした。

——ぎこちない…

随分と不自然な笑顔だ。容姿が優れているからこそ余計に表情の不自然さが目立ってしまっている。

この不自然さが作り笑いだからなのか、どの笑顔もこうなってしまうのかはわからないが早急に解決すべき問題だろう。

——日課に笑顔の練習でもしてみようか。

何事も練習だ。案外すぐに自然に笑えるようになるかもしれない。

そこまで考えたところで自分が鏡に向かって笑顔の練習をしている様を想像してしまい、思わず吹き出してしまう。

客観的に見れば滑稽以外の何物でもない。

「随分楽しそうね。」

「フフツ… そう見える?」

「ええ本当に楽しそうに見えるわ。」

鏡を見てみれば不自然さを感じさせない微笑を浮かべる自分が写っていた。笑顔とまではいかないが口元はしっかりと笑っている。なんだ。練習なんてしなくともちゃんと自然に笑えるじゃないか。

——今はこれでいいや。

どうせ一日一夜で解決する問題ではないのだ。少しでも自然に笑えるのなら今はそれでいいだろう。

作り笑いについてはこれから少しずつ改善していこう。突然人生が終わりでもしな
い限り、まだまだ時間はあるのだから。

「うん。本当に楽しい…。」

——この時間がもつと続いて欲しいな。

姿鏡から離れ、部屋の中を歩き回ってみる。

膝下まで丈のあるスカートが動きの邪魔になるのではないかと懸念していたが、ほとんど気にならない。

むしろズボンよりも動きやすく感じる。

それでも好き好んで履こうとは思えないが、時間が経てばこの思いも変わるのだろうか。

「美空ー。日焼け止め塗らないといけないからこつち来なさい。」

「わかった。今行くー。」

日焼け止めに関しては塗るだろうと予め予想はしていた。

何故ならアルビノである『私』にとって日光は害でしかないからだ。

紫外線の害から身を守る働きを持つメラニンが殆どない以上、自分は日光に短時間当たただけでも日焼け若しくは火傷を負ってしまう。

そうならない為にも紫外線対策を自分でしっかりとしなければならぬ。

先ほどの場所に戻り、お母さんから日焼け止めクリームを受け取る。

そして渡された日焼け止めを腕や足、顔などの服で隠れていない部分に塗っていく。

外出するたびに塗らなければならないのは面倒だが、命に関わることの為仕方ないだろう。

——おかしな話だ。

命を捨てた自分が命の危険を避けなければならないとは何たる皮肉だろうか。しかし自分が捨てたかったのは以前の『俺』であつて今の『私』ではないのだ。調子の良い話と言われても仕方がないことは分かっている。だが少なくとも今の『私』は死にたいと思っていない。全ては今後次第である。

「塗り終わったよ。」

「それじゃあそろそろ時間的にも良いし、出発しましょうか。」

「うん。」

「祐樹ー。行ってくるわね。」

「行つてきますお兄ちゃん。」

「行つてらっしゃーい。」

さあ少女となつてから初の外出の時間だ。

少女のお出掛け

今日はいいい天気だ。空には太陽がさんさんと輝き、顔に当たる春風は気持ちがいい。きつと何処にあるかも知らない草原で寝転がって昼寝でもしたらさぞ心地いいことだろう。

——ま。そんなことをすればどうなってしまうのやら……

自分はもう太陽の下には出られない。今手に持っているものがいいい証拠だ。

外側は白で、内側は反対に真黒な日傘。自分が外を出る際の必需品となるだろう。

それだけではない。肌は日焼け止めを塗った上で長袖を着て隠し、眼には強い光にやられないようサングラスもかけている。

何も対策しなければ一体何分耐えられるだろうか。長くとも10分、もしかすると5分も持たないかもしれない。

そのぐらい今の自分が外に出るといふことは危険なことなのだ。先述の行動は自殺行為と言ってもいい。

—— どうであれ、俺に文句を言う資格なんてないのだけれど。

今の自分の状況は本来であれば有り得ないことだろう。死んだ人間が過去に戻るなど異常だ。

自分が完全に死ねなかったのには、何か理由があるのだろうか。しかし真相を知るすべはない。

ならば、自分にできることはただ次の生に感謝し、精一杯生きることだけだ。

—— それに折角のお出かけなのだから楽しまなければ損だ。

お母さんとお出かけなんて何時ぶりのことだろうか。

高校に入るまでは日曜日にはよく一緒に買い物に出掛けていたが、高校に入ってから休日には昼まで寝てばかりで一緒に出かけることは殆どなかった。

朝早くに起きて高校へ向かう生活に疲れていたので仕方がないことかもしれない。けれど少し思うところはあった。

だからこそ嬉しい。またこうしてお母さんと一緒に出掛けられることが何よりも嬉

しい。

歌でも1つ歌いたいくらいには今の自分は機嫌が良かった。

「お出かけてどこに行くの？」

「お出かけと言ってもちよつとした散歩みたいなものなだけだね。取り敢えず向こうの百貨店まで行こうと思うわ。」

「そうなんだ。」

「10分くらい歩かないといけないから辛くなったら何時でも言つてね。」

「うん。わかった！」

う。10分程度であれば何の問題もない。景色を見ながら歩いていけば直ぐに着くだろう。

幸いなことに今は春だ。街中の至る所に桜が咲いている為、見るものには困らない。

それに街並みもまた、15年前ということもあり最後に見た様子とはかなり違っている。

——懐かしい……

目に映る全てのものが懐かしい。

改めて戻ってしまった年月の長さを実感することが出来た。

15年という年月は同じ場所をここまで違うものに変えてしまいうらしい。

もちろん15年後と何も変わっていない部分も少しはあるが、それでもその周囲のものは大なり小なり変わっていた。

あまりの変わりように何とも言えないもやもやしたものが浮かび上がってくる。

——15：：いや、7年も何やってたんだか：：

街が段々と変わりゆく中で自分は何をしてきたのだろう。

8年後：：小学校を卒業するまでは本当に楽しかった。純粹に生というものを謳歌していたように感じる。

だが中学校に入ってからは一転して最早地獄だ。ひたすら失敗した。恥を重ねた。後悔を続けた。

次第に自分で自分のことがどうしようもなく嫌いになっていった。自分に期待すらしなくなってしまう。

街が段々と改善していく中で自分は改悪していったのだから笑いものだろう。そしてその結果がああ結末だ。

——駄目だな…。どうも悪いことばかり考えてしまう。

どんなことでも悪いように考えてしまうのは自分の悪い癖だ。

この悪癖には何度も何度も苦しめられてきた。

できることならこんな悪癖さつきと直してしまいたい。しかし癖というものはそう簡単に直せるものではないのだ。

直すことが出来ない以上、自分にできることは精々悪いように考えてしまわないよう気を付けることくらいである。

——折角良い気分だったのに台無しだ…。

心の中でぶつくさと言いながらお母さんから離れないよう歩いていく。願わくばデパートに着くまでにあの良い気分に戻りたいものである。

「ねえ美空。」

先程の嫌な気分が落ち着いてきた頃、近くを流れる川や咲いている桜を眺めながら歩いていると突然お母さんに話しかけられた。

「うん？何？」

「美空はさ、ここうやって外に出ることは好き？」

「うん好きだよ。」

自分はインドア派の人間ではあるが、外に出ることが嫌いな訳ではない。

適度な運動はやっていて楽しいし、嫌なことも忘れられる。

休日に何の目的もなく商業地区を放浪するのも良い。

目に付いた店に入店して、その場の気分で物を買うことだって大好きだ。

「そう…。」

お母さんが気まずそうな顔をする。

気軽に外に出れない身体で生んでしまったことを申し訳なく思っているのだろうか。

どんな身体で生まれるかは運でしかないのだから、お母さんは何も悪くないというのに。

「その——」

「でも私は家で過ごすことの方が好きだよ。」

「ッ!？」

これは本心からの言葉である。

先ほど言った通り、外出することは気分転換にもなるから好きだ。

だが、心が落ち着く場所は家以外にはない。

外にいるとどうしても人目が気になってしまい、落ち着かないのだ。

現に今も、人とすれ違うたびに好奇の目で見られてしまうのでそわそわしている。

「どっとうしてっ。」

「何も気にしなくていいからかな。」

人目を気にせず、のんびりと過ごすごうことができる。

本当の自分を曝け出すことだってできるのだ。

眠っても良い。だらけたって良い。泣いたって良い。

何も気にすることなく自分の好きなことができるから家で過ごすごうが好きだ。

「そう。ありがとうね。」

「ん。」

——解決したなら良かった。

お母さんが自分に向けて感謝の言葉を言ってくる。

そこに先ほどの気まずそうな顔はなかった。

良いことだ。やはり母親には笑っていて欲しい。

自分はお母さんのあんな姿を2度と見たくないのだ。

歩き始めてから少し経ち、目的地である百貨店が見えてきた。百貨店の周囲には休日ということもあり、大勢の人で賑わっている。

—— 足が痛い。

たかが10分程度と侮っていた。両足が痛みを訴えかけてきている。一歩も歩けないという程ではないが、なるべく早くどこかに座って足を休ませたいものだ。

—— これは流石に無視できない問題だな。

恐らくこの身体はかなりの運動不足なのだろう。

でなければ15分程度の道でここまで足を痛めたりはしないはずだ。

家で暮らす分には何の問題もないのかもしれないが今回の様に外出する必要があるとなると話は別だ。

15分程歩いただけでこの痛みなのだから、これ以上の外出となると考えたくもな

い。

今後の生活の為に運動不足は早急に解決しなければならぬだろう。

——アルビノである以上、頻繁に外に出ることは厳禁だしな…

しばらくは室内でできる運動を考えることが課題になりそうである。

「美空。疲れたでしょう？あそこで休憩にしましょうか。」

お母さんが指差した先を見つめる。

見えたものは小洒落た一軒の喫茶店。

確か有名なコーヒーチェーン店ではなかっただろうか。

何はともあれ休めるのなら丁度良い。

お言葉に甘えて休ませてもらおう。

「うん。休憩にする。」

お母さんに返事をして、喫茶店を目指して歩いていく。

——迷子にならないように気を付けないと。

喫茶店へと行くためには百貨店の前の道を通っていくのが一番近い。

しかし、百貨店の周囲には先ほども言った通り、大勢の人が歩いている。

ただでさえ小さい今の身体にこの人の量だ。気を抜けばすぐに迷子になってしまうだろう。

お母さんと逸れてしまわないように気を付けなければならない。

逸れないようにお母さんの直ぐ傍を歩きながら周りの開いている店へ目を向ける。

そしてあることに気付いた。

——見られている…

それも1人2人の少人数ではない。目に映る殆どの人が自分のことを見ていた。

中には指を差してくる人や、スマホを此方へ向けて写真を撮ろうとしている人までいる。

やめてほしい。盗撮は立派な犯罪であることを知らないのだろうか。

本人からすれば軽い気持ちによる行為なのかもしれないが、こつちからすればたまつたものではない。

もしその写真をネットに上げられでもしたら自分はどうすればいい。

見られている原因は既に分かっている。十中八九この全身真つ白な異様な見た目が原因なのだろう。

しかし原因が分かったところで解決のしようがないのでどうすることもできない。

——見ないでよ…

向けられる好奇の目が気持ち悪い。

一刻も早くこの場所を通り過ぎたいという思いが自然と足を速くさせる。

だが、どれだけ先に進んでも新しい視線に襲われてしまうので意味がない。

「ヒッッッ」

突然誰かに腕を掴まれ、悲鳴が漏れる。

「なんだ、お母さんか…。」

驚いて後ろを振り向けば、自分の腕を掴んでいるのはお母さんだった。それにしても何故、私の腕を掴んでいるのだろうか。

「どうかしたの？」

平静を装い、お母さんに尋ねる。

「どうしたのってこっちが聞きたいわ。いきなり走り出して、逸れたらどうするの？」

「あの…その…ごめんなさい。」

「…何かあったの？」

何かを察したらしいお母さんが逆に尋ねてきた。

「周囲の視線が怖い。」と素直に言うべきなのだろうか。いや、言わない方が良いだろう。お母さんにいらぬ迷惑を掛けたくない。この程度、時間が経てば直ぐに慣れる。

「…別に何も無いよ。」

「ちゃんと顔を見て言いなさい。」

「何もなかったよ。」

「本当に？」

「うん。だから早く行こう！」

「そう…」

今できる精一杯の笑顔をしながらお母さんの質問に答えた。

これで良いのだ。いつもと何も変わらない。

お母さんに迷惑を掛けるくらいなら一人で苦しむ方がマシだ。

「美空。」

「何？」

「手、出しなさい。」

「…はい？」

いきなりどうしたのだろうか。

言葉の意図がわからない。

私の手で一体何をする気なのだろう。

「何で？」

「いいから！」

理由を聞こうとするも、何も答えてはくれない。

仕方がないので言われた通りに手を差し出す、するとお母さんは差し出された手を直ぐに握った。

——何なんだ？

ただお母さんと手を繋いでいるだけである。

この行為にどんな意味があるのか全く分からない。

「落ち着いた？」

「ッ!？」

お母さんの言葉に驚く。

まさか気付かれているとは思わなかった。

一体何時から気付いていたのだろう。

「何で…。」

「何だか辛そうに見えたからね。」

「…そうかな？別に普通だと思っけど…。」

「美空がどう隠そうとしてもお母さんにはわかるの。」

「そっか。」

自分の行為は全て無駄だったらしい。

得意げな表情で此方を見つめるお母さんの顔を見ながらそう思った。

不思議と嫌な気はしない。むしろ嬉しく感じてしまっている自分がいる。

「それじゃあ、行きましようか。」

「うん！」

——安心する…

手を通して伝わってくるお母さんの温もりが心地いい。
視線ももう気にならなかった。

「美味しい？」

「うん。美味しいよ。」

「そう。なら良かった。」

あの後には特に問題もなく店内へと入った。

店内は間接照明にゆったりしたBGMが流れ、落ち着いた雰囲気を感じさせる。

現在はテーブル席でお母さんと注文したものを食べている最中だ。

お母さんがショートケーキとカプチーノを自分はサンドイッチとオレンジジュース

を注文した。

注文の際に素でブラックコーヒーを頼んでしまいそうになるというハプニングはあったが、未遂で済んだのでよしとしよう。

「この後って何処かに行くの？」

「この後？うーん、特に行きたいところもないから帰ろうと思ってるけど」

何か目的があつて此処まで来たのかと思つたがどうやら違うようだ。

本当にただの散歩だったらしい。いや私の為のリハビリに近いのかもしれない。

この身体の運動不足は元々備わっているものだろう。

ならばそれを解消するために日常的にこういったことをしていてもおかしくない。

「美空は何処か行きたいところはある？」

「私？私はない。」

行きたいところと言われても、思い浮かぶところはない。

それにもしい思い浮かんだとしてもそこが15年前に存在するのかは行くまで分から

ないのだ。

「特に思い浮かばないかなー。」

「そう。なら食べ終わったら帰りましょうか。」

「それでいいよ。」

話もほどほどに自分の前にある食事を食べることに集中する。

今はこの時間を楽しむことにしよう。

「今日は楽しかった？」

現在時刻は3時前、帰り道の途中だ。

結局1時間以上あの店で過ごすことになってしまった。

途中で追加注文したことが原因だろうか。

「うん。本当に楽しかった。」

楽しかった。心の底からそう思う。

此処まで楽しい時間を過ごすことができたのは何年ぶりだろう。

「良かったわ。朝からずっと浮かない顔をしてたから心配だったのよ」

——
!?

思わず声が出そうになる。

本当に何から何までお見通しだったらしい。

それとも自分分かりやすいのだろうか。

「…… 凄いね。」

「お母さんだもの。」

「そう…」

理由になつていないような気もするが何故か納得できてしまった。
自分もお母さんのような人になれたら良いのに。

「ねえ美空？」

「どうしたの。」

「貴方がどうしてそんなに辛そうなのかまでは、私には分からないけれど。」
「…」

「辛かったら何時でも相談していいからね？ 貴方は私の大事な娘だもの。辛そうな顔はしてほしくないわ。」

「聞かないんだ？」

「今はまだ聞いて欲しくなさそうだからね。美空が言いたくなるまで待つことにするわ。」

「ごm… ううん、ありがとう。何時か必ず言うね。」

「約束よ？」

「うん。約束。」

どうして自分が此処にいるのか。何故少女になっているのか。男の自分はもうなつてしまったのか。

この身体になつてから分らない事ばかり増えてしまつている。

それだけではない。前世のことも未だに自分を苦しめ続けているのだ。

本当は今すぐにでも言つて楽になりたい。

——でもそれは駄目だ。

どれも一人で解決すべきことで誰かに助けを求めるべきではない。

そう思つてしまうのだ。だからこの事をお母さんに言うのはもつと先のことになるだろう。

でも何時か必ず言おう。問題がすべて解決した時、笑つてお母さんに話そう。

「ねえお母さん。」

「うん?」

「手、繋いでほしいな。」

「フフツ：． いいわよ。」

「ありがとう。」

この日常がずっと続けばいいのに。

少女の父親

「祐樹！美空！ご飯できたわよ。」

「はーい。」

帰宅してから数時間が経ち、時刻は午後6時を迎えた。
夕飯には丁度良い時間帯である。

「今日のご飯は何？」

「今日はメンチカツよ。」

「わーい！」

この数時間、本当に長かった。

不信感を与えないために漢字で書かれた本は読めず、ゲームをしようにも家にあるのは幼児向けのものばかり。

結局、ただボーッとTVを見るくらいしかやることがなかったのだ。

——何か策を考えないと俺は暇で死ぬ。

そんなことを考えてしまう程退屈なのである。

子供の頃は何をして遊んでいただろうか。

臆気に覚えている記憶を掘り返そうと努力するが、得られるものはなかった。

仕方がない。何せ15年前の記憶だ。よほど強烈なものでもなければ思い出せないだろう。

尤も、たとえば思い出すことができたとしても、その遊びが今の自分でも楽しめるものとは限らないのだが。

「はあ…。」

暇つぶしの1つも思いつかない自分の発想の貧しさにため息が出る。

良い案が思いつくまで考えたいところだが、意地になつて考えても、良い案は思いつかないだろう。

遊びの方から近づいてくることに期待しながら手探りで探していくしかない。

「いただきます。」

思考が一段落したところで目の前の夕食を食べ始めた。

「…」

夕食を食べ始めて数十分、自分は苦い顔をしたまま固まっていた。視線はテーブルに置いてある皿へと向いていた。

——サラダ…

皿の上で嫌な存在感を放つ緑黄色。

それが自分を苦い顔にさせた原因だった。

精神は大人である自分が野菜を嫌がるなど滑稽に見えるかもしれないが、これは精神の問題ではない。

身体が拒否反応を起こしているのだ。

少女としての『私』が野菜を食べることを嫌がっている。

——食いたくないなあ……

昨日までは少し躊躇う程度だった野菜が、今は途轍もないゲテモノに見えてしまう。先程からサラダを箸で持ち上げて、すぐに元の場所に戻す動作を繰り返している。

「あー……」

「食べなさい。」

「……」

「食べなさい。」

「……はい。」

残された唯一の希望も儂く散ってしまった。

お母さんの視線が痛い。早く食べなければ。

もう何度目になるか分からないが、恐る恐る箸でサラダを持ち上げる。

そしてそれを口へと放り込み咀嚼した。

「ツ!?!?!」

不味い。自然と涙が溢れ出てくる。

苦みと渋みから吐き出してしまいそうだ。

とてもじゃないが飲み込むことができない。

———お、お茶……

口内に留まり続けるサラダをお茶で無理やり流し込む。

お茶のおかげで何とか飲み込むことができたが、飲み込んだ後も数秒間は動くことができなかった。

「ハアツ……ハアツ……」

「……大袈裟じゃない?」

大袈裟ではない。これでもまだ抑えている方だ。本当なら吐き出してしまいたかった。

流石にそれは汚すぎるのでやる気はなかったが。

——— こんなどころまで子供にならなくても…

落ち着きを取り戻してから考える。

まさか味覚まで子供になっているとは思わなかった。

味覚が変化しているということは好みも変わっているのだろう。だからあの反応は私が可笑しい訳ではない。

——— 半分くらい食べたかな…

残りの量を確認しようと再度、皿の方に目を向ける。

「嘘だろ…」

思わず素の感想が洩れてしまったがそれどころではない。

サラダが4分の1しか減っていないのだ。

つまりそれは今の地獄を最低でも後3回は耐えなければいけないということである。

「もう無理い……」

泣きたい。

現在の時刻は午後7時半。サラダ地獄から解放されてから30分が経過した。体調もようやく回復してきたところだ。食べ終わった直後は本当に酷かった。吐き気で動くことさえできなかつたのだ。

——もう2度とサラダは食べたくない……

到底無理な願いだがどうか叶って欲しい。
食事の度にあんな地獄を味わいたくないのだ。
野菜ジュースとかで代用できないだろうか。

「美空ー。」

「……うん？」

「今の内にお風呂入っちゃいなさい。」

「……わかった。」

遂にこの時が来てしまった。

パジャマを持って脱衣所がある1階へと下りていく。

階段を下りていく最中にそっと胸に手を当ててみれば心臓が早鐘を打っているのが分かった。

脱衣所に入り、扉を閉める。

ふと洗面鏡を覗いてみるがそこには変わらず少女の顔があるだけだった。

「スウ… ハアー…」

気持ちを落ち着かせようと大きく深呼吸をする。

そして、ようやく着ている服を脱ぎ始めた。

脱いだ服がぼさりと音を立てて床に落ちていく。

ただ服を脱ぐだけの為、そう時間はかからない。

1分も経たない内に一糸纏わぬ姿になった。

「…」

何も纏わない少女の身体を鏡越しに見つめる。

この身体になって半日が経とうとしているが、未だにこの身体が自分であるという実感が湧かない。

ずっと夢を見ているかのような気分だ。

胸… は当たり前前だけどないか…

視線を自分の身体へと向けて、手でペタペタと触ってみる。しかし、これと言って特筆すべきことは見つからなかった。

いくら子供とは言え女性なのだから、男性と違う部分があるのではないかと考えたがそうではないようだ。

胸を触っても虚しい平面が広がっているだけである。

思春期はまだまだ先のため当然なのかもしれないが。

「何も感じないな…。」

心の方は意外なことに平常心を保っている。

多少の恥ずかしさは残っているがそれだけだ。

身体に興奮を覚えることもなければ、朝の様に取り乱すこともない。

ただ、今ではできるだけ下半身に目を向けないようにしているので、そのことは少なからず関係しているだろう。

「…クシユンツ!!!」

くしゃみが出てしまった。

長時間裸でいたせいで、身体が冷えてきてしまったようだ。

「早く入ろ。」

「はあく気持ちいい…。」

湯船へ浸かり、伸び伸びと身体を伸ばす。

同じの湯船の筈なのに、大きく感じてしまうのは気のせいだろうか。

——なかなか苦戦したなあ…

思い返すのはつい先ほどまでのこと、身体と髪を洗った時のことだ。

身体の方は一部以外は特に変化してない為、そこまで苦勞することなく洗うことができた。

問題は髪の方である。今まで長い髪を洗ったことがない上、男の時の様に洗っていいのかわからなかったのだ。

——まあお母さんのおかげで何とかなっただけ。

結局、自分で洗うことは諦め、お母さんに任せることにした。

今後の為にも間違った洗い方を覚えるのはではないと考えたからだ。

自身の身体を他の誰かに見られるのはかなり恥ずかしかったが、それに見合う価値はあったと言えるだろう。

——でも、何時かは自分一人でできるようにならないとな。

何時までもお母さんに頼る訳にはいかない。

1人でできることは1人でやらなければと余計な負担をかけてしまう。

自分はお母さんの負担にはなりたくないのだ。

「シャンプーブラシだっけ？初めて知ったな。」

視線を鏡の前の物体へと向ける。

今まで髪を洗うのにシャンプー等を除いて、道具を使うことはなかったが、髪が長いとああいった道具も必要になるらしい。

「そろそろ上がろうかな。」

身体が熱くて思考がぼんやりする。

それほど長い時間入っていない気がするのだが、熱を溜めてしまったのだろうか。湯船から立ち上がり、浴室を出ていく。

「寒っ。」

浴室と脱衣所の温度差に驚くも、濡れた身体をバスタオルで手早く拭いていく。

そして体温が奪われない内に下着とパジャマを着て、脱衣所を出ていった。

——あれ？

階段の電気が消えている。

お母さんが私の髪を洗った後、間違えて消してしまったのだろうか。不思議に思いながらもそういうこともあるかと自分を納得させた。消えてしまった電気を再度点けて、階段を上っていく。

そしてリビングのドアを開けた。

「お。風呂上りか？ ただいま美空。」

.....

「おーい。美空？」

「.....
できればもう2度と会いたくなかったよ。
おかえりなさい。お父さん。」

「おう。ただいま。」

今日の前にいる人物は『黒瀬広海』くろせひろみ。血縁上は自分のお父さんになる。認めたくはないが。

姓が『白河』と『黒瀬』で違うのは、『白河』が母方の姓で、『黒瀬』が父方の姓だからだ。

つまり『黒瀬美空』が今の正しい名前となる。

まあ、何れ『白河』に変わるのだからそこまで気にすることではない。

私はお母さんの子であれば十分だ。

「髪を乾かすからこっち来て美空。」

「はい。」

お父さんの横を通り過ぎて、お母さんの元へ行く。

「それじゃあ、乾かすから座ってね。」

「うん。」

お母さんの前に座り、ドライヤーで濡れた髪を乾かしてもらおう。

ドライヤーから送られてくる温風が眠気を誘ってくる。昼にも軽く睡眠をとったはずなのに、直ぐに眠くなってしまうのはこの身体のせいだろうか。

——まだ寝ようとは思わないな……

時刻は午後8時を過ぎているが、子供が寝るにはまだ少し早いような気がする。せめて9時過ぎまでは起きておきたい。

「はい。乾かし終わったわよ。」

「ん。」

ようやく乾かし終わったようだ。

やはり髪が長いと乾くのに時間がかかるらしい。

——手入れは面倒だけど、やっぱり長い方が良いな。

手入れと精神的なことを考えるとやはり髪は短い方が楽なのかもしれない。だが、自分は髪が長い方が好きなのだ。

できるのなら、いつそ腰のあたりまで伸ばしてやりたい。

「相変わらずサラサラね。」

「そう？嬉しい。」

乾かし終わった後は、ブラシで梳いてもらう。

折角、綺麗な髪なのだから良い状態で保っておきたいのだ。

「はい。おしまい。」

「ありがとう。」

「どういたしまして。」

髪の手入れが終わり、立ち上がる。

——何しようかな。

如何せんやれることが少なすぎる。

こんなことなら外出した際に、何か暇潰しでも買ってもらえばよかった。

「そういえば広海さん。」

「雪花。どうかしたのか。」

「今日ね、美空とお出かけたのよ。」

「それは本当か。」

「本当よ。ね？美空。」

「え？… うん。」

急に話を振られたことに驚きながらも返事をする。

「楽しかったか美空？」

「… うん。楽しかったよ。」「それがどうかした？」

嘘を吐く意味もないので、正直に答える。

今日のお出かけはここ数年で一番楽しかったと言ってもいい程だ。

「そうか。今度お父さんとも何処かに行くか？」

「…行きたいけど、何処に行くの。」「行きたくないなあ…。」

「美空は何処か行きたいところはあるか。」

「…何処でもいいよ。」「正直どうでもいい」

お父さんと話す度に身体の内側からドロドロしたものが込み上がってくる。

何時もの事なので、もう随分と慣れてしまったが、それでも長時間となると辛くなってしまう。

この気持ち悪さから解放される為にも、早く話を終わらせてしまいたい。

「それじゃあ、お父さんの方で決めておきな。」

「それでいいよ。でも行くならお母さんとお兄ちゃんも一緒に良いな。」

「当たり前だろ。俺達は家族なんだから。」

「チツ…それもそうだね。」「どの面下げて言ってるんだよ。」

会話が終わると同時にドツと疲れが押し寄せてくる。

何故、お父さんとの会話にここまで精神を使わないといけないのだろう。

だが気を抜いてしまうとボロが出てしまいそうなので気を抜く訳にはいかない。

——もう寝よう。

今の会話で精神的に疲れ切ってしまった。

つい先程、寝るにはまだ早い時間だといったばかりだが、前言撤回である。

今後の為にも早く寝て、体力を回復させようと思う。これ以上、お父さんと同じ部屋にいたくないのだ。

「美空。もう寝るの?」

「うん。もう眠たいから寝るね。」

「そう。ちゃんと歯磨きしなさいよ。」

「わかってる。」

歯を磨いて、最後にトイレをしに行く。

眠気のせいかな、それとも回数をこなしたからかはわからないが、最初よりは平常心で済ませられた。

「おやすみ。」

「ええ、おやすみなさい。」

「ああ、おやすみ。」

「おやすみー。」

最後におやすみとだけ言って、自分の部屋へ上がっていく。

自分の部屋に着くと直ぐにベッドに倒れ込んだ。

「夢じゃないんだよな…。」

ベッドの上でポツリと小さく呟く。

『激動』。そうとしか言いようがない一日だった。

『自殺したはずなのに死なずに、何故か少女の姿で15年前に戻っていた。』

改めて振り返っても意味が分からない。どう理解しろというのだ。

「明日も続いていくのか…。」

今日のことを夢ではなく現実ならば、明日以降も続いていくことになる。そして何時かは自分が死んだであろう『あの日』さえも超えるのだろう。

「悔いがないようにしないとな。」

絶対にはないと思っていたチャンスなのだ。無駄になんてするものか。

前世の自分は失敗と後悔の連続だった。

だからこそ、今世こそは最高の人生にしてみせよう。

夢を見よう。自由を手に入れよう。努力もしよう。思い描く理想を手に入れてやろう。

「強くなつてやる。」

そんなことを考えながら眠りについた。

少女の呪い

「あれ……？」

厚手のカーテンによって光が遮られた部屋の中、少女の間抜けな声が響く。
TS逆行生活2日目。時間はおそらくお昼ぐらい。

声の主である白い少女は寝ぼけ眼を擦りながら身体に違和感を覚えていた。

「う〜ん？」

一見すると何処にもおかしいところはない。

何度確認してみても違和感の正体が分からず、思わず首を傾げてしまう。

しかし、気のせいかと思えば身体を動かしたところでその正体に気付いた。

「……………嘘」

気付いてしまった事実には啞然とする。

そして時間をかけてようやく絞り出した声は震えていた。

「なん…で…嘘…えっ夢?…」

この光景が夢なのではないかと思ってしまう。

だが、試しに頬を掴ってみてもただ痛いだけで夢から覚めるなんてことはない。

それに夢にしてはあまりにも意識がはつきりとし過ぎている。

だから間違いなくこれは現実だ。

それはわかつている。わかつてはいるが信じられない。

「なんで脚が動かないの…?」

自分の脚が動かないなんて。

思えば、ヒントのようなものはそこら中であつたのだ。

昨日の朝のお母さんの発言、何故か手すりのある階段、異常なまでに運動不足で低体力な身体。

どれもアルビノだと思えば納得できるものばかりで、自分が女性になつたことと比べれば些細な違いだと思つていたが、こうなるのならばもつと気にしておくべきだつた。

「何でもこうも上手くないかなー」

分からないことだらけの初日が終わり、今日から『私』の輝かしい人生が始まる。なんて考えていたのに実際はこれだ。

流石に文句の1つでも言いたくなってくる。

「でもまだマシな方か…。」

脚が動かないことだけならまだ遣り様はある。

これももし脚だけでなく腕も動かなかったのなら完全に打つ手がなかった。

たとえそうだとしても、理想を目指すという目的は諦めないのだろうか。

「それに一生このままってことはないだろうし…。」

よくよく考えてみれば昨日はちゃんと歩けていたのだから、これから先ずつと脚が動かないままなんてことはないだろう。

流石に完全に動かせるようになるには時間がかかるかもしれないだろうが、明日には多少は動かせるようになっていてもおかしくない。

「そろそろ行こう。」

これ以上考えたところで脚は動かないのだから、後はなるようになれというやつだ。起きた時から段々と強くなってきている空腹感の為に一刻も早く朝食を食べることにしよう。

はやる気持ちを抑えながらリビングに向かった。

「わっ!? 落ち… キヤアツ!!?」

ドサツ!!!

「ツ
!?!?」

最低限の練習ぐらいはベッドの上でしておくべきだったかもしれない。

かなりの時間と体力をかけて、ようやくリビングに辿り着いた。
少し前から身体はボロボロで、お腹はペコペコだ。

「おはー。」

「おはよう美空。」

「おお、おはよう美空」

リビングにお父さんがいたことに舌打ちを吐きそうになる。

基本的に休日のお父さんは自分の部屋にすることが多いので、今日もそうだと思つていたのだが、何故か今日はリビングにいるらしい。

いなくていいのに。

「そういえばさつき上から凄い音が聞こえたけど、何かあつたのか?」

「…えっ?… あーちよつとね… ベッドから落ちただけ」

「大丈夫!? 怪我してない?」

「あ、うん全然大丈夫。」

大丈夫じゃなかったら此処まで来れていない。

といつても足に関しては何れも別件で負傷している為、厳密には大丈夫とは言い難いのだが。

まあ自分が大丈夫だと思えば多分大丈夫だろう。うん。

「そう……なら良かったわ。お腹空いたでしょう？お昼ご飯にしましょう。」

「あーうん……その前に少し良い？」

「?……どうかしたの？」

何と言えばいいか迷ってしまい、言葉に詰まる。

無駄な不安を抱かせない為にも、あまり大事にはしたくない。

だからといって、事が事だけにぼかして言つて隠し通そうとしても直ぐにばれてしま
いそうだ。

どうするか迷つたが、しばらく悩んだ末に正直に言うことにした。

「実は起きた時から殆ど足が動かなくて……」

「ツ!? 本当（か）!?!」

「……うん。本当だよ。」

目に見えて動揺しているのが分かる。

反応から考えるに流石に脚が動かないというのは今まで1度もないか、滅多にないこ

とのようなのだ。

まあこんな異常事態が日常茶判事になられても困る。

「立つことはできるの?」

「無理かな。」

「無理して一人でリビングに来ようとせず、私達を呼んだら良かったのに。」

「別に動けないってわけじゃないから大丈夫だよ。」

「美空にとって大丈夫でも私たちは心配なの。」

「…ごめんなさい。」

良かれと思ってやったことだが逆に迷惑を掛けてしまったようだ。

とは言え、誰かの手を借りるのはやはり性に合わない。

今後も余程のことがない限り、誰かの手を借りることはなさそうだ。

「分かればいいの。それじゃあお昼ご飯にしましょう。」

「あ、その前にトイレ行ってくるね。」

「分かったわ。連れて行ってあげる。」

「え。」

冗談じゃない。

何が悲しくて、精神年齢ほぼ大人にもなつて親にトイレを連れて行つてもらわなければならぬのだ。

他のことなら多少は妥協しようと思えるが、それだけは嫌だ。

何とかして1人で行けるよう説得しないと。

「1人でも大丈夫だよ。さっきだって1人で階段下りられたし移動だつて」

「美空。」

「はい。」

「心配なの。」

「はい...」

駄目でした。(この後物凄い介護された。)

「あれ？お母さん何処か出掛けるの？」

「ええ。買い物に行ってくるからお留守番宜しくね。」

「そうなんだ。分かった。」

昼食が終わって身体を動かそうと努力しているとお母さんが何処かに出掛けようとしていた。

どうやら買い物に出掛けるから留守番をして欲しいらしい。

それくらいならお安い御用だ。

自分にとつても自分だけの時間ができる上に、過剰な介護から解放されるので嬉しきしかない。

「りよーかい。全然良いよ。」

「そう。お父さんも家にいるから、困ったことがあつたらお父さんに言ってね。」

——いなくていい!!

「お、お兄ちゃんは…?」

「祐樹は一緒に買い物に行くわよ。」

「あ、そうなんだ…」

選りにも選つて、お父さんと2人きりになるとは。

最悪だ。ただでさえ、お父さんと同じ部屋にいただけでも辛いのに2人きりでおそらく数時間を過ごすさないといけないなんて最悪としか言いようがない。

先程のように1人でも大丈夫だと言いたいところだが、言ったところでどうせ突っぱねられそうだ。

——何でお父さんと。

しかし、どうせ2人きりになるのならお兄ちゃんと良かった。

そうだ、それが良い。一応今は夫婦なのだからお父さんとお母さん2人で買い物に出かけて、自分とお兄ちゃんがお留守番すれば全て解決…

—— いや、駄目だ！

それは駄目だ。というかそっちの方が駄目だ。

お父さんとお母さんが2人きりで出かける姿なんて想像しただけで吐きそうさ。

そんな光景を見てしまったら今の自分では耐えられる気がしない。

一瞬で気絶する自信がある。

—— 自分も付いて行く？

無理そうさ。

付いて行っても何の役にも立てない上に、何より付いて行く手段がない。

脚が不自由な人の移動手段としてパツと思いつくものと言えば、車椅子だがこの家に

車椅子はおそらくない。

となれば後は背負ってもらうぐらいしか自分は思いつかないのだが、そっちは最早論外だ。

頼めばやってくれそうではあるが、何の役にも立たないどころか逆に迷惑を掛けてし

まっている。

それならしない方が良い。

——詰みか…

諦めた方が良さそうだ。

大人しくお父さんと2人きりになるのを我慢するしかない。

「そろそろ行ってくるわね。」

「ああ、うん。行つてらっしゃい…」

「祐樹ー！そろそろ行くわよー。」

「はーい。」

「お兄ちゃんも行つてらっしゃい…」

——早くお母さん達帰ってこないかな…:

留守番が始まって約1時間が経とうとしているが、気まずい静寂がずっと続いていく。

正直に言つて早く終わってほしい。

「美空。」

「ん? 何?」

「脚大丈夫か?」

「…うん。別に大丈夫だよ。」

時折こうして話しかけてくれることもあるが、それも2言3言で終わってしまう為、話が全く続かない。

それに、相も変わらず身体の内側からはドロドロしたものが溢れてくる。

ある程度は覚悟していたとは言え、これは予想以上だ。

——やばい吐きそう…

「美空？」

「…どうしたの？」

「本当に大丈夫か？もしかして何処か痛むのか？」

「大丈夫だから気にしないで。」

「でも辛そうだな——」

「良いから!!!」

「!？」

「お願いだから放っておいて…」

「…分かった。」

「…ごめんなさい」

心配なんてしなくていい。変に期待なんてさせないでほしい。

今後の為にも、お互いの為にも自分には構わないで欲しい。それが最善策なのだから。

お願いだから、自分に無駄な希望を持たせるような愚かなことはしないで欲しい。

「何処に行くんだ？」

「下の階。」

「連れていこうか？」

「いい。1人でも大丈夫。」

別に何か用がある訳ではないが、とにかく1人になりたかった。

1階に下りたところで頭が冷え、先程までの自分の行動に呆れ果てた。

自分がやっていることはただの八つ当たりでしかないことは分かっている。

同じ姿で、同じ声で、同じ名前で、同じ命の別人。

今後の為を思うなら先程の様に跳ね除けるのではなく、父と娘として助けあった方が
良いのだろう。

「はあ…。」

だが、自分にはそれができない。それだけはどうしてもできない。

あの姿を見ると必ず昔の記憶が蘇ってしまうのだ。

あの忌々しい記憶が。当事者を除けば自分しか知らない、何年経つても忘れられないあの記憶が。

そして最悪なことに自分はまた同じ光景を見なければならぬ。

嫌だな……

あの光景を2度も見たくない。

1度見ただけでトラウマなのに2度も見れば今度こそ心が壊れるかもしれない。

だが、両親が離婚するのならあの出来事は必ず見ることになるだろう。

しかし、離婚を阻止するのかと聞かれれば、答えは『いいえ』だ。

確かに自分が何かすれば多少は引き延ばせるかもしれないが、どれだけ頑張ろうとそれが精々だ。

やるだけ無駄だし、やる気もない。

「美空。」

「ん。」

階段から声が聞こえてきた。

見てみればお父さんが階段を下りてきている。

考え込んでいたせいで全く気付かなかった。

「どうしたの？」

「どうしたじゃないよ。そんなところにいたら風邪引くぞ。上に戻ろう？」

「そうだね・・・」

「何か悩み事でもあるのか？お父さんで良ければ聞くぞ？」

気付いていたらしい。そもそも隠そうとすらしていないけれど。

とは言え、気付かれていようと何も言う気はない。

それに自分が抱える悩みごとの原因の大半はお父さんだ。

解決するはずがない。

「別に悩みごとなんてないよ。」

「そうか、ならいいんだが。もし悩み事があつたら相談してくれよ？美空は大事な俺の

娘なんだから。」

娘…… 娘ねえ……

「もう、そろそろ上に上がろうか。」

「もう少しだけ一人にさせて。」

「……」

「……」

「はあ…… あと少しだけだぞ。」

「ごめんなさい。」

上の階に上がっていくお父さんの背中を見送つてからため息を吐く。

「娘…… 大事な娘か……」

自分はもう貴方を尊敬なんてしていない。

それどころかお父さんと呼びこそすれど、既に家族だとすら思っていない。

自分の家族は母方の人達とお兄ちゃんだけで、自分の親はお母さんだけだ。逆行したからと言って「もしかして」と希望を抱く気はない。どうしようが結局はまた裏切られるのだから。

「どうせまた裏切られるのなら端から期待しなければいい……」

心がズキリと痛んだような気がした。

少女の幼馴染

あれから2日が経過し、歩くことができるまでには回復した。

と言っても、相変わらず走ることはできず、歩くスピードも普通の人と比べると遅いのだが。

今後の回復次第では走ることを諦めなければならぬかもしれない。

「あー暇だー。」

毎日が暇で仕方ない。

1日2日であれば、どうということとはなかったが、それ以上となると我慢でどうこうできなくなってきた。

いい加減に我慢の限界だ。怪しまれるかもしれないが少し大胆に動くことも必要かもしれない。

「!!!」

ということはこの声は帰ってきたお兄ちゃんたちの声だろうか。それなら、この声の主は全員自分が知っている人達のはずだ。

——会うか？

幸いなことに今は夕暮れ時の為、日の光はそれほど気にしなくていい。一応、念のために日傘を差して、パーカーのフードでも被っていれば完璧だろう。

「……まだ行けるか。」

子供の声に交じって大人の声もちらほら聞こえてきている。

と言っても帰ってくるように言っているわけではない。

母親同士で世間話をしているのだ。

家の前でやる井戸端会議が一番近いだろうか。

昔の記憶が確かなら、この世間話が終わらない限り、子供達は家に帰らず遊んでいるはずである。

時間はまだある。顔を見せるぐらいはしておいた方が良くかもしれない。

——大地もいるのかな……？

思い浮かべるのは近所の子供たちの中で唯一同年代の幼馴染のこと。
『豊山大地』とよやまだいちそれが幼馴染の名前だ。

アイツとの関係は……何なんだろう……良かったとは思っている。

もし、一言で言うのなら『腐れ縁』が一番正しい表現だろうか。

アイツは酷い男だ。頻繁に煽ってくるし、人の弱点を的確に突いてくるしでとにかく性格が悪い。

まあ、売り言葉に買い言葉で直ぐに煽りに乗ってしまう自分も自分なのだが、でもその反面、一緒にいて過ごしやすいく奴でもあった。

趣味嗜好は似ているし、長い付き合いなので気心が知れている。

何より、アイツは人の踏み込んで欲しくない事には絶対に踏み込まないのだ。だから一緒にいて誰よりも楽だった。

そんな感じで最後の時まで関係が続いた幼馴染。それが豊山大地だ。

自分はそんなアイツを信頼している。

「久しぶりに会いたいし、行くか。」

そんな幼馴染とも別々の高校に行つてからは全然会っていない。

精々ネット上で会話をしながら、偶に一緒にゲームで遊ぶぐらいだ。

姿を最後に見たのは2年くらい前だろうか。

だから久しぶりに会つて顔を見ておきたい。それが例え15年前の少年の姿でも。

念のために日焼け止めを塗つてから、落ちないようにゆっくりと階段を下りていく。

その後、玄関で外靴に履き替えてから、忘れずに日傘をしつかりと持つ。

そして、1度深呼吸をしてから外への扉を開いた。

——懐かしい……

周囲を見渡して最初に思ったのはそれだった。

走り回る子供、世間話をするお母さん達、どれも同じだ。本当に懐かしい。

今となつても微かに覚えている光景を見て、改めて戻つてきたのだと感じた。

「あらっ？」

およそ十数年ぶりに見た光景に一人で懐かしんでいると横から声が聞こえてきた。声の方を見てみればお母さん達が自分のことを見ている。どうやら気付いたようだ。取り敢えずお辞儀をしておいた。

「出てきて大丈夫なの!？」

「別に大丈夫だよ。」

自分の元まで走ってきたお母さんに大丈夫だと伝える。

心配してくれるのは嬉しいが、そんなに過保護にならなくても別に良いのにと思ってしまう。

一応は病み上がりなので仕方ないのかもしれないが。

「あつ、もしかしてその子美空ちゃん？」

「あら本当、美空ちゃんじゃない。大きくなったわね。」

「本当にね。前見た時は赤ちゃんだったのに。」

——ん？赤ちゃん!?

お母さんと話していた2人の女性が此方に近づいてきた。

何やら、自分の話をしているようなので耳を傾けると、聞き捨てならない話が聞こえてくる。

赤ちゃん？最後に会った時が？それはおかしい。

まだ幼いとはいえ4歳児は外遊びを覚える年ごろだ。外に出ていないとは俄かには信じがたい。

アルビノだからか？それともただの聞き間違いか。

「最後に会ったのは… 3年前かしら？自分から外に出ようとしなから、随分時間が経っちゃったわね。」

お母さんの言葉に聞き間違いではなかったと確信する。

それにしても以前の『私』は一体どんな人間だったのだろう。

この年齢まで自分から外に出たがらないなんて天性の引きこもりの才能でもあったのか。 いらぬ。

「ほら、美空。挨拶しなさい。」

「えと……こんばんは。しr・黒瀬美空です。よろしくお願いします。」

「礼儀正しいわね。うちの子にも見習ってほしいわ。」

挨拶しろと言われたので、取り敢えず挨拶したが何とも子供らしくない挨拶になってしまった。

これで怪しまれるなんてことがなければいいのだが。

まあ受けはいいので大丈夫だろう。

「それじゃあ次は私達ね。豊山桜とよやまざくらです。よろしくね。」

「池葉舞いけはまよ。久しぶりね美空ちゃん。」

「2人とも昔に会ったことがあるんだけど覚えてる美空？」

「……覚えてない。」

「そっかー。まあ、覚えてなくても仕方ないか。」

嘘、当然全員覚えてる。

だが、この場では覚えていないといった方が自然だろう。

当たり前前だ。3年前、それも赤ちゃんの時の出来事なんて覚えている人は殆どいない。

そもそも、自我が芽生えてるかすら怪しいのに。

「それにしても、美空ちゃん本当に可愛くなったわね。」

「ね。将来は絶対美人さんになるわ。」

「えと…ありがとうございます？」

可愛いなんて生まれてこの方言われたことがないので反応に困ってしまう。

何と言うか、物凄くこそばゆい。褒められ慣れていないからだろうか。

それと同時にモヤモヤともしてしまう。これに関しては精神が男性なので仕方ないだろう。

「美空。」

「何？」

「折角だから他の子たちと遊んで来たら？」

「えっ。」

会って顔を見る気はあったが、遊ぼうとは思っていなかった。

理由は勿論、脚への負担が心配なのだ。

折角、治り始めたのに、遊んだせいでまた動けない状態に逆戻りなんてことだけには絶対にやりたくない。

「うくん。やめとく。」

「どうして？」

「また脚が動かなくなったら困るから。」

「そう……。でも他の子達にも挨拶だけはしなさいよ。」

「わかってる。」

元よりそのつもりだ。

だが、残念なこととその当の本人達の姿が見えない。

外に出たときに向こうへ走っていく姿が見えたので、おそらく近くにはいるのだと思う。

まあ、待っていればそのうちやってくるだろう。

「!!!」

「ん?」

お母さん達と話しながら待っていると、遠くから声が聞こえてきた。

さつき家の中で聞いた声と同じ声だ。

その場に止まっていると声は段々と大きくなってくる。

更に少し待つと、とうとうその姿が見えた。

うん。見たことのない顔は1つもない、全員前世と同じだ。

自分の様に性別が違うということもない。

「あれ?美空だ。」

「やっほーお兄ちゃん。」

お兄ちゃんが驚いた顔で話しかけてきた。

その後ろでは、幼馴染達が好奇の視線で自分のことを見ている。

十中八九、この髪と目が原因だろう。

初日にも思ったが、今の自分の見た目は人目を引きすぎる。

どうにかならないものか。

「祐樹。その子誰？」

「前にいるって言ってた俺の妹だよ。」

「へー、その子がそうなんだ。」

お兄ちゃんと女の子が親しげに話している。

彼女はお兄ちゃんと同年代の子供だ。

そんな訳で、前世では幼馴染の中で特にお兄ちゃんと仲が良かった。

今世でもきつとそうなのだろう。

それに、彼女はまた別の事でも自分とは関係のある人物だ。

それは…

「ほら、美空挨拶しなさい。」

「あ、うん。分かった。」

お母さんに挨拶をするよう促され、考え事を中断する。取り敢えずは挨拶をすることが先だろう。

「初めまして。黒瀬美そr——」

「お化け？」

「……はい？」

挨拶をしていると、突然声が割り込んできた。

誰だ。割り込んできた奴は。それに何だお化けって。

あながち間違いでもないから反応に困るだろうが。

—— 一体誰が…

「こらっ！大地!!失礼なこと言わないの!!」

「いや、だって…。」

—— お前かい…。

大地と呼ばれた男の子が先程の女の子に怒られている。

そう。彼女『豊山早苗』とよやまさなえは豊山大地のお姉さんなのだ。

だから、お兄ちゃんとは別に大地関連でも会うことが多かった。

幼馴染の中で大地の次に思い出のある人を聞かれたら早苗さんだろう。

「えっと、美空ちゃん?ごめんね。弟が変なこと言っちゃって。」

「… 大丈夫ですよ?」

「ほら大地!謝りなさい。」

「…。」

「大地?」

「…ごめんなさい。」

「あつハイ。」

渋々といった様子で謝ってきた。

まあこのぐらいで怒るような自分でもないので特には気にしない。

それに同い年とは言え、相手はまだ子供だ。

多少の失礼は仕方がないだろう。

「初めまして黒瀬美空です。黒瀬祐樹の妹で4歳になります。よろしくお願いします。」

「へー同い年なんだ。俺は豊山大地。よろしく。」

「あつ私は豊山早苗って言うの。さつきは弟が本当にごめんね。」

「あはは……気にしなくていいですよ。」

仕切り直してもう一度挨拶をする。

今度は何事もなくやることができました。

「あつ哲也君も挨拶しないと。」

「ん。初めまして。池葉哲也です。」

これで幼馴染は全員だ。

日によつて増えることも減ることもあるが、基本的に幼少期はこの5人で一緒に遊んでいた。

遊ぶ内容は色々だ。公園で遊ぶこともあれば、誰かの家に行くこともある。

全員でどこかに出掛けることもあれば、夏には近所で集まってバーベキューなんかもやったりしていた。

そういつたことがまたできるのであれば楽しみだ。

「なあ、美空……ちゃん？」

「美空でいいよ。で、どうしたの？」

「じゃあ俺のことも大地でいいぞ。あのさ聞きたいことがあるんだけどさ。」
「何？」

ある程度、挨拶が終わったところで大地が話しかけてきた。

取って付けたように『ちゃん』を付けていたが直ぐに止めさせる。

今更、コイツに呼び捨てではなくちゃん付けされるなんて気持ち悪くて仕方がない。

それにしても聞きたいことか。この見た目の事かな？

「なんでそんなに白いの？」

「白……髪の毛の事？」

「うん。」

「これはね、生まれた時からこうなの。染めたりしている訳じゃないよ。」

「へーそうなんだ。」

「それに……」

そこまで言ったところで大地の手を掴む。

「わっ!?!いきなりなんだよ!」

「ちゃんと触れられるし、脚だつてあるでしょ?」

「……お、おう。」

驚いた様子で自分のことを見てくる大地に手の感触をしつかりと感じさせてから、履いていたズボンの裾を捲り上げ、隠れていた脚を見せた。

大地が少し赤らんだ顔で自分の脚を見てくる。なんだか少し妙な感覚だ。晒していた脚をまた隠してから掴んでいた手を放す。結局のところ、何が言いたいのかというところ。

「だからお化けじゃありません。」

「な!?!」

これが言いたかっただけである。

怒らないとは言ったが、蒸し返さないとはいっていない。

幼い大地の姿を見て少々揶揄いたくなってしまったのだ。

とは言え、随分と大人げないことをしてしまった。反省しなければいけない。

まあ、初対面の一言目で『お化け』と言ってきた大地も十分悪いだろう。

「お、お前生意気だ!!」

「あはは……ごめんごめん。」

怒りからか先程よりも顔を赤くしながら大地が言ってきた。

少しやり過ぎてしまったかもしれない。
今度から気を付けよう。

「あらあら、随分と仲良しね。」

「な!?!仲良くねえよ!?!」

「うんうん。心配だったけど仲が良さそうで良かったわ。」

「お母さん...」

いつの間にか、遠くで見守っていたお母さん達が近付いてきていた。

仲良く見えていたのなら嬉しいが、大地がそのことを必死に否定しているのが少し悲しい。

「こら大地。そんな酷いこと言わないの。折角の同い年なんだから仲良くしないと駄目よ。」

「むー俺悪くないし。あつちが悪いだ。」

「美空もあんまり意地悪しちや駄目よ。」

「はい。ごめんなさい。」

今回は自分が悪かった。

過度な弄りはもつと仲が良くなるまで禁止にしようと思う。

「美空ちゃんはちゃんと謝れて偉いわね。もし良かったら、大地と仲良くしてあげてね。」

「はい。もちろんです。」

言われなくても仲良くするつもりだ。

自分にとって大地は、幼馴染で腐れ縁で親友なのだから。

大地から拒絶でもされない限り、一緒に遊びたいと思っている。

「そろそろ良い時間だし、お開きにしましょうか。」

「そうね。」

「そうしましょうか。」

見上げてみれば、空はもうだいぶ暗くなっている。

時計がないので分からないが、きっと夕食に良い時間なのだろう。
家に帰るのが少し名残惜しい。

まだ他の人とも全然話せていないし、他に話したいこともいっぱいあるのに。
こんなことならもっと早く、外に出れば良かった。

「大地!!!」

「・・・なんだよ。」

「またね。」

「おう・・・またな。」

また会う日が楽しみだ。早く明日にならないかな。

そんなことを考えながら家に帰った。

キャラ紹介＋裏設定

・黒瀬家

〔白河美空しらかわみそら（黒瀬美空くろせみそら）〕

性別：女（元男） 年齢：4歳 誕生日：11月15日

・外見 肩まであるストレートの白髪に白い肌、空色の眼

・好きなもの 海産物、ゲーム、音楽

・嫌いなもの 一部の野菜（特にネギ）、酢、ホラー、夜、機械、騒音（特に電話の音や大きな音）

〔詳細〕

本作の主人公。名前の由来は『美しい空』から。他人の視線や音に敏感であり、基本的に自分の身体を触られることや見られることが嫌い。一部を除いて自分以外の人は信頼しようとしませんが、もし誰かを信頼したならその相手のことをとことん甘やかそうとする。常に何らかの強迫観念に苛まられており、それ故に完璧な成功を求めて些細な失敗でさえ自分自身を責め立ててしまう難儀な性格。マザコン。機械は嫌いというよ

りも苦手。精神の一部が壊れている。

【黒瀬祐樹】
くろせゆうき

性別：男 年齢：6歳 誕生日：7月15日

- ・ 外見 黒髪の短髪、癖毛の為所々跳ねている。黒色の目
- ・ 好きなもの 甘い物、辛い物、ホラー
- ・ 嫌いなもの 焼き魚、ピーマン

〔詳細〕

主人公の兄。名前の由来は特になし。妹のことは兄として大事に思っている。また外に出ようとしない妹のことを心配し、一緒に遊ぶよう誘ったりしていた。(なお結果は：.)しかしその一方で、妹の体質が原因で海などの日差しが強い場所に家族で出掛けられないことを不満に思ってもいる。近所の豊山早苗とは同年代の幼馴染であり、かなり仲が良い。

【黒瀬雪花】
くろせゆきか

性別：女 年齢：27歳 誕生日：6月18日

- ・ 外見 背中の中ばまであるストレートの黒髪、黒色の目

・好きなもの 甘い物、海産物、動物

・嫌いなもの トマト、狭い場所

〔詳細〕

主人公の母親。名前の由来は雪花^{せつか}。主人公を不自由な身体で生んでしまったことをずっと後悔している。夫婦の仲は現在は良好。子供のことは常に気にかけているので、ほんの些細な変化にも気づく。その為、最近の美空の変化や父親への対応の変化にも気付いているが、2人の問題（と思っている）に自分が関わっていいものかと考え、とりあえず静観している。あまりにも解決しないようならば自分が間に入って解決するつもり。

〔黒瀬広海^{くろせひろみ}〕

性別：男 年齢：28歳 誕生日：1月21日

・外見 黒髪と暗い金髪のメッシュ、ツーブロック、こげ茶の目

・好きなもの 辛い物、機械、タバコ

・嫌いなもの 魚（調理方法関係なく）、ゴーヤ

〔詳細〕

主人公の父親。名前の由来は『広い海』から。主人公曰く、血が繋がっていることす

ら嫌らしい。しかし、元から仲が悪かったわけではなく、離婚前までは普通の親子のよ
うに仲が良かった模様。仕事は機械関係。タバコを良く吸うが家族の前（特に美空の近
く）では吸わないように気を付けている。お酒は飲まない。美空から悪感情を向けられ
ていることには一応気付いているが、拗ねているだけだと思っている。（ずっと続くよ
うなら怒るつもり）性格はそれなりに厳格で、短気。

〔白河裕也（黒瀬裕也）〕

性別：男 年齢：19歳 誕生日：11月15日

・外見 黒髪の短髪、黒い目、常に眠そう

・好きなもの 海産物、ゲーム、音楽

・嫌いなもの 一部の野菜（特にネギ）、酢、ホラー、夜、騒音（特に電話の音や大きな音）

〔詳細〕

主人公の前世。自分自身に絶望してしまった人。小学生までは臆病ではあるものの社
交的な何処にでもいる少年だった。しかし、中学生になってからは荒れに荒れて常に苛
立ちモノに当たたる人物に豹変。その後、高校生になってからは空気の抜けた風船のよう
に何もかもどうでもよくなった。それでも一応生きようとはしていたようだが、大学生

になってから様々なことに直面し、とうとう耐えられなくなってしまった。最後の1年間
はストレスと自己嫌悪により頭痛や吐き気、倦怠感などの体調不良に常に襲われてい
た。

・豊山家

【豊山大地】とよやまだいち

性別：男 年齢：4歳 誕生日：10月18日

- ・ 外見 暗い茶髪の短髪、茶色の眼
- ・ 好きなもの ラーメン、ゲーム、音楽
- ・ 嫌いなもの 酢、茸類

〔詳細〕

主人公の同年代の幼馴染。名前の由来は『豊かな大地』から。『豊』の字が苗字に入っ
ているのは良い感じの名前が思い浮かばなかったからだったり。前世では主人公とは
親友と言える仲だった。その為、余程度の過ぎた行為でなければ大体許されるくらいに
は信頼されている。因みに今世での主人公からの好感度は既にMAX（友達的な意味
で）大地の方も主人公のことを悪くは思っていない。これからどうなるのやら…

【豊山早苗】
とよやまさなえ

性別：女 年齢：6歳 誕生日：7月7日

- ・ 外見 茶髪のサイドテール、琥珀色の眼
- ・ 好きなもの シチュー、果物
- ・ 嫌いなもの 苦い物、暗い場所

〔詳細〕

黒瀬祐樹（主人公の兄）の同年代の幼馴染。主人公を除けば近所の子供たちの中で唯一の女性であり、他の子供達のストップパー役兼お姉ちゃん的存在。前世の主人公とは祐樹+大地関連で会う回数が多かった為、よく気にかけていた。今世では主人公のことを祐樹の話から聞いており、同性と言うこともあつてずっと会いたいと思つていたらしい。祐樹との間に恋愛感情があるのかは不明。

【豊山桜】
とよやまひばり

性別：女 年齢：27歳 誕生日：3月28日

- ・ 外見 茶髪の癖毛、肩までのロング、茶色の眼
- ・ 好きなもの 和菓子、果物

・嫌いなもの 一部の虫

〔詳細〕

豊山大地&早苗の母親。性格はゆったりとして優しいが怒るとかなり怖いらしい。未登場の夫との仲は良好。前世の主人公とは自分の子供の様に接していた。実は祐樹と早苗、大地と美空がくっつかないかなとか考えてる人。

・池葉家

【池葉舞】
いけはまい

性別：女 年齢：28歳

〔詳細〕

主人公のご近所さん。池葉哲也の母親。前世の主人公とは偶に会った時などに世間話などをしていた。

【池葉哲也】
いけはてつや

性別：男 年齢：5歳

〔詳細〕

主人公の幼馴染の1人。前世では幼少期にそれぞれの家でよく遊んでいたが、中学に入ってから関わりが薄くなってしまった。

美空と1ヶ月とやらかし

この身体になってから1ヶ月程が経過した。

自分の姿以外にも前世との変化がないか探したり、慣れない生活に順応しようとしている内にそれだけの時間が過ぎてしまった。

結果としては前世との相違点らしきものは自分以外見つからなかった。流石に細部までは覚えていないので分からないけれど、それでも覚えている限りのことは、男の時に全く同じだった。

体調の方はあまり良いとは言えない。

2日目の時のようなことが何度も起こっている。

大体週に1日、多くて2日ほどだろうか。症状の重さは日によってさまざまだけれど、基本的に足に異常が起きるところは同じだ。

この1ヶ月の間でにお母さんに連れられて病院に行ってみたりもしたのだが、結果はなんの異常も無し。別の病院に行ってみても診断結果は同じだった。

医者からは何か精神的な問題ではないかと言われたのだが、精神的なこととなると心当たりが多すぎて逆に何が原因かわからない。

結局、何一つとして分からずじまいだった。

平日の午後3時過ぎ。

殆どの人が学校や仕事に勤しむであろう中、自分はリビングで本を読んでいた。

下の階からはお母さんが掃除機を掛けている音が聞こえてくる。

こんな年からはお母さんが掃除機を掛けることを誰かにバレたりしたら怪しまれるんじゃないかと思うかもしれないが問題ない。既にバレた後だ。

——不覚だった…

まさか、家族全員がちよつとした用事で出かけて、家に自分一人だけになった時に、あまりの暇さに本棚に立てかけてあった本を読んでいたらそのまま寝落ちしてしまうなんて。

幸い、その時読んでいた本が振り仮名付きの本だったので何とか納得してもらえた。

は思うが、あの時の自分は本当に間抜けだった。

とは言え、こうして好きに本を読めるようになったのだから結果的には良かったと言える。

——暇じゃないって良いな……

自分以外誰もいない静かな部屋にペラリペラリとページを捲る音だけが響き渡る。

最近はこうして1日を過ごしていることが多い。

健康や体質などの様々な理由によつて幼稚園に通えていない自分は、やれることが少ないのだ。

だからと言つて、幼稚園に通いたいかと聞かれれば答えは否だろう。

今の自分が幼稚園に通うとなると、脚の障害やら日差しやら厄介なことが幾つも付き纏うだろうし、何より周りの子供たちに合わせなければならぬので余計な心労を負う羽目になる。

おまけに、例えば幼稚園に行けたとしても体質の関係上、幼稚園のイベントに殆ど参加できない。

と、どう考えても懸ける労力と利益が釣り合っていない。

——まあ、幼稚園に行くか否かは両親と医師が話し合つて決めたことであつて、自分は殆ど

関わっていないんだけど。

理由はどうあれ小学校に入学するまでの間は、こうして家でのんびり過ごそうと思つている。

幼稚園で出会うような同年代との関わりは小学校に入つてからでも間に合うはずだと思いたい。今は今後のために少しでも自分の身体を治すことが最優先だ。

同年代と関わらないとは言え、幼馴染だけは別だ。

大地達とは積極的に会うようにはしている。

現に、今からも学校から帰つてきたお兄ちゃんに誘われて、大地達と会うつもりだ。

——まあ一緒に遊んだりはできないんだけどね。

とは言え、こんな身体では外遊びなんて到底できるはずもなく、大抵はベンチに座って皆が遊んでいる姿を眺めていたり、目の届く範囲をぶらぶらとうろついているだけである。

大地達もそれを分かってくれているのか、積極的に話しかけてきたり軽く誘ってくることはあれど、無理に参加させてきたりということとはしてこなかった。

ただそんな自分でも少しだけなら一緒に外で遊べる日というのが実はあつたりもする。

それは日が殆ど出ていない日、要は曇りの日だ。雲がぶ厚ければ傘を差す必要がなく多少は身軽に動くことができる。

それでも元が弱い身体である以上、激しい運動なんてしてしまうと数日先まで地獄を見ることになってしまう。

——もうあんな目には合いたくないかな…

そんなことを考えながら玄関を出る。

今日は晴天、梅雨を前にして段々と蒸し暑くなってきた。

こうも晴天だと残念ながら一緒に遊ぶどころか日陰から出ることもできなさそうだ。せめてもう少し雲が出ていれればいいのに。

まあ別にいい。もう慣れたし何より身体はどうあれ中身は大人だ。その程度の我慢はできる。

いつものように眺めるだけで十分だ。

「

ぼんやりと物思いにふけりながら前へ進む。

少し暑い。肌を隠すために来ている長袖が日に日に暑く感じるようになってきている。

まだ5月でこれなのだから本格的な夏になってしまふとどうなるのだろうか。

熱中症で死ぬんじゃないだろうか。

「い——ら」

——あっつい…

駄目だ意識すると余計暑くなってきた。
何か別のことも考え…

「おい！美空！」

「ひゃいッ!？」

——なにになになにに
!?!?

突然、大声で呼びかけられて我に返る。

慌てて後ろを振り向くとお兄ちゃんがムツとした表情でこちらを見つめていた。
何だか知らないが怒らせてしまったらしい。

「お兄ちゃんか…びつくりさせないでよ。」

「何度呼んでも返事しない美空が悪い！」

「えっ?…ごめん気づかなかった。」

そういえば何か喋っていたような気もする。
暑さに気を取られて完全に意識していなかった。

「それでどうしたの?」

「美空がどっか行こうとするから。」

「え?公園じゃないの?」

「今日は早苗の家で遊ぶんだぞ。」

「あっそうなんだ…」

そういうことはもっと早く言ってほしい。

だがいいことを聞いた。自分にとってはむしろ都合だ。

家の中なら日の光に当たることも暑さの心配もない。

それに余程のことでもない限りは今の自分でも一緒に遊ぶことができるだろう。

「早くいっー」

「うん。」

逸る気持ちを抑えてお兄ちゃんの後を追った。

—— やっぱり近いなあ…

時間にして約15秒の長旅(一)を終えて、早苗さんもとい大地の家に着いた。

近所なのだから当たり前だが、やはり近い。

そのおかげで、こんな子供でも好きな時に遊びに行けるのだから有り難いが、外出の際は必ずと言っていいほど目に入るので、珍しさとか目新しさと言ったものはない。

「祐樹くんに美空ちゃんいらっしやうい。」

家の前には大地のお母さんが立っていた。

わざわざ出迎えるの為に待っていていたらしい。

「早苗のお母さんこんにちはー。」

「こんにちは。」

「こんにちはは。早苗も大地も待ってるから上がって上がって。」

「それじゃあ、お邪魔します。」

「お邪魔します。」

「早苗達はこの先のリビングにいるから。美空ちゃんも楽しんでね。」

「うん。」

——懐かしい……

中に入ると同時に懐かしさが一気に湧き上がってくる。

思えば、前世で最後にこの家にお邪魔したのは何時になるだろう。

高校生？ いや中学生だったかもしれない。

となると4〜5年程前だろうか。

段々と会う気力も時間も無くなってしまったのだから仕方がないが、改めて考えると悲しく感じてしまう。

今世では何年経っても一緒に遊ぶような仲でいたい。

——願わくば前世以上の仲に…:

もちろん親友という意味で。

そのためにも今日は目一杯遊ばせて貰おう。

言われた通り、リビングに入ると早苗さん、大地、哲也くんの姿があつた。

「よー早苗。」

「あ！祐樹に美空ちゃん！こんにちは！」

「こんにちは。哲也くん、大地もこんにちはー。」

「こんにちはー。」

「…。」

「むっ。」

大地からだけ挨拶が返ってこない。

それどころか此方を見ることすらしない。

気づいてない訳がないし、これは明らかに無視されてる。

このまま気にせず放置してもいいけれど。

仲良くなりたいといった矢先に、そんなそっけない対応をしていいものか。

でも、変に接してしまったせいで逆に嫌がられても困るし…

——— どうしよう…

実を言うと1か月経った今でも周囲の人達との距離感はあまり掴めていない。

幼馴染辺りが特に顕著だ。

今まで何度も対応に困ってしてしまうことや返答に時間がかかることがあった。

話し言葉なんかもそうだ。男口調ではないとはいえ、男の時の様な感じで喋ってしまえば奇異の目で見られてしまったり、子供心で何度も尋ねられるのだ。

お母さんからも「美空はお利口さんで助かるわ。」とか「周りの子より成長が早くて手が掛からない。」なんて言われたけれど、流星に少しは怪しまれていそうだ。

そういう訳で最近では話す言葉にも少しだけ気を付けている。

——あゝ本当にどうすれば…

「美空ー。」

「んえ？」

「なんでずつと立ってるの？」

「あつ。」

気づけば、部屋の中で立っているのは自分だけという状況だった。このまま突っ立っている訳にもいかないので、空いていた大地の横に座った。

——俺何かしたっけ。

未だに此方を見向きもしない大地を横目で見ながら考える。

つい先日、遊んだ時は無視なんてしてこなかったのに。

何かしてしまつた覚えはない。

やったことと言えば、いつも通り喋つたことぐらい。

「ねえ。」

「……」

取り敢えず話しかけてみるも、返事はない。

それどころか反応すらしない。

聞こえなかったただけかとも思ったけれどやっぱり違う。

これだけ近くから言ってるのに、何の反応も示さないのだからこれは間違いなく無視されている。

「…… ねえ。」

「……」

「ねー。」

「……」

「おーい。」

「……」

今度は身体を揺すってみたり、耳元で囁いてみた。

それでも反応はない。

来た時と変わらず、俯いて座っているだけだ。

——なんなんだほんとに。

少しくらい反応してくれたっていいじゃないか。

ちよつとくらい反応してくれないと、こつちだつてどうすればいいのか分からない。

これじゃあこつちが馬鹿みたいじゃないか。

もう諦めて放置してもいいけれど、こつちも無視をされると無理にでも反応させたくなってくる。

「ねー。」

「…」

「…」

「…」

「…はあ。」

「どうしたの美空ちゃん。」

「あ。大地のお母さん。」

身体を大きく揺さぶりながらも一度大地に話しかける。

それでもやっぱり反応はない。

何か知っているかもしれない早苗さんはお兄ちゃん達とテレビの前で何かしているので何だか聞きづらい。

どうしたものかため息をつくとき大地のお母さんが話しかけてきた。

「大地が無視してくるの。」

「あー…」

大地のお母さんなら何か知ってるかもしれないと思い、無視してくることを伝えると何だか申し訳なさそうな顔になった。

「実はね…」

「うん。」

「皆が遊びに来るちよつと前までね、早苗と大地は喧嘩してて…」

「え？」

「拗ねてるんだと思う。」

「へ？」

—— 拗ねてる……？

なんだそれは。

どんな理由かと思えばただ拗ねているだけ？

そんなまさかと思つて下から顔を覗き込んでみると確かに不機嫌そうな顔をしてい
る。

俄かには信じ難いが、まさかそんな理由だったとは。

意外というか、完全に予想外である。

—— へえ…… そつかー拗ねてるだけかー。

「こら、大地。美空ちゃんが話しかけてくれてるのに無視したらダメでしょ。」

「……ふんっ。」

「こーらー。」

——そうだよな、まだ子供だもんな。

お母さんの言葉に僅かながらも反応を返した大地を見ながらそう思う。

まだ子供。それも小学校に通う年齢にさえなっていない子供だ。

そうと分かっているはずなのに、拗ねているという考えが思い付かなかったのは、自分が未だに目の前にいる大地と記憶にある大人の大地を重ねてしまっているからだろう。悪い癖だ。

「ほら、美空ちゃんにごめんなさいするの。」

「…」

「だーいーちー!」

「…」

「…ふふっ」

尚も可愛らしい抵抗を続けようとする大地を見ながら小さく笑う。

何故だか今の大地を見ると、何時もと違った感情が湧き上がってくる。

うまく言葉で言い表せないが、愛らしいというか優しくしてあげたいというかそんな感じだ。

自分には縁のない存在だったので正確には分からないけれど、もし自分に年の離れた弟とか息子とかがいたらこんな気分になるのだろうか。

——撫でたい……

ふとそんな願望が頭に浮かんだ。

「っ!? なーやめろ!?!」

「あらあら〜」

自分に背を向けて蹲っている大地に近づいてそつとその頭を撫でる。

当然のように大地には嫌がられるが、それを無視して撫で続けてやった。

正直、自分でも何故こんなことをしているのか分からないけれど、1つだけ確かなことがある。

意外と撫で心地はいい。

「あ。大地が撫でられてるー。」

「やめろー!!」

「〜♪」

大地の声で早苗さんが気づいてしまったらしい。

その上、早苗さんの声でお兄ちゃんや哲也君までこつちを向いた。

だからと言って撫でるのを止める気は全くないけれど。

知らず知らずのうちに鼻歌まで歌いながら、大地を抱き寄せて撫で続ける。

「やめろー!!!」

「うるさーい!」

—— ああ、どうしよう。

何だかこのままだと大地を幼馴染として見れなくなってしまうそうだ。

でも不思議と気分がいい。何なのだろうこの気持ち。
離れようとする大地を抑えながら暫くの間撫で続けた。

「祐樹くん、哲也くん、美空ちゃん、また来てね。」

「ばいばい。」

「皆またねー」

「おう。またなー。」

「またねー。」

「うん。またねー」

——楽しかったー。

「お邪魔しました。」と一言言ってから家を出る。

あの後はずっと交代しながらテレビゲームやっていた。

出てくるゲームは懐かしいものばかりだったけれど、良いゲームは何時やっても楽しいものだ。

対戦ゲームではずっと集中狙いをしてくる大地が邪魔だったが、大人の心で適当に接待した後、一度だけボコボコにしてやった。

——何だったんだろうな…

思い出すのは、遊びに来て直ぐに起こった撫でたい衝動のこと。

結局あの後は、5分程撫でたところで大地に逃げられてしまったのだが、それ以降は撫でたいなんて思うこともなかったし、いつも通り幼馴染として接することができた。

あの時どうしてああ思ったのかは分からない。

拗ねた大地を見ていると不思議とそう思ってしまったのだ。

——嫌われてないよな？

大地にはかなり警戒されてしまったけれど、帰る頃にはまた自然と打ち解けていたの

で結果オーライだったとは思う。

ただ今後も今日みたいなのがあれば、何時かは大地に嫌われてしまわないか心配だ。

「ただいまー。」

「ただいまー。」

「おかえりなさい。どう？楽しかった？」

「うん。楽しかった。」

「楽しかったー。」

「そっか。良かったわね。」

今日は文句なしに楽しかった。

久しぶりに大地達の家には入れた上に、一緒に遊ぶこともできた。

子どもとしてはどうなのかもしれないが、今日のような日をもつと増えてくれると自分としては嬉しい。

わがままだけれどやはり見てるだけというのは退屈だった。

——次は何時遊べるかな。

次に遊べる日が今からでも待ち遠しい。